

第3章 吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査

1 調査の経過

昭和60年の5月に大学会館が新設されることを端緒とし、その周辺地域とくに前庭部分（Fig. 4 参照）の環境整備構想が環境整備委員会等よりもち上がり、これに伴い事務局から資料館へ当該地の埋蔵文化財有無の照会があった。

前庭部分と称する地は総面積約6000㎡で、上下二段に分かれている。上段部分（約2600㎡）¹⁾は、昭和57年度の「大学会館新営予定地M-14・15区の試掘調査」において、弥生時代から室町時代にかけての遺構が多数遺存し、その分布密度が極めて高い地域として位置づけられている。そのため学術の上から遺構に影響のある環境整備は問題であり、資料館としては、当部分の遺跡の重要性を説明するとともに、前回の調査をもとに現地表面から遺構面までの深さを提示し、その範囲内の土地掘削で処置できる環境整備計画を要望し、事務局、環境整備委員会等もこれを了承した。ただし、下段部分については、これまで埋蔵文化財に関する公式な資料がなく、そのため埋蔵文化財有無等について即答できないことから、その回答には試掘調査の必要を要望し、以後、事務局で検討することとなった。

昭和60年の5月下旬、事務局から、試掘調査の予算が急遽ついたため調査を至急を実施したいとの要請があり、そのため資料館は年間スケジュールを一部変更して対処することとなった。

調査は、昭和60年7月11日より昭和60年8月6日まで人文学部考古学研究室の協力を得て実施した。なお今回の調査は、遺物包含層・遺構の有無、遺物包含層までの深度の把握、確認を主目的とするため調査期間、経費等に制約があり、また当該地は調査後は再び現状通りに埋め戻すことから、確認した遺構の掘り込みは最少限にとどめた。

最終の調査面積は約592㎡で、調査対象地の約18%を占める。

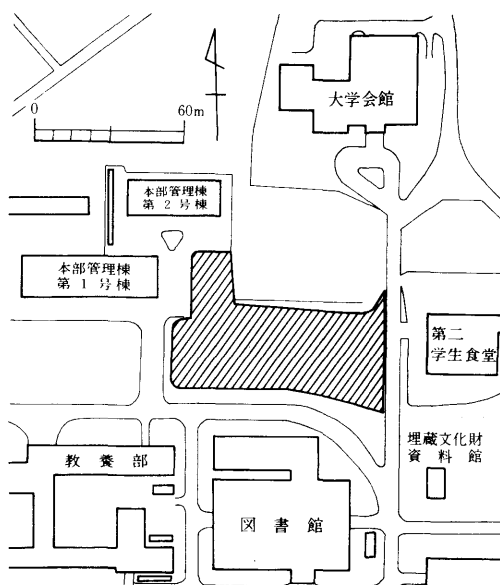


Fig. 4 調査区位置図

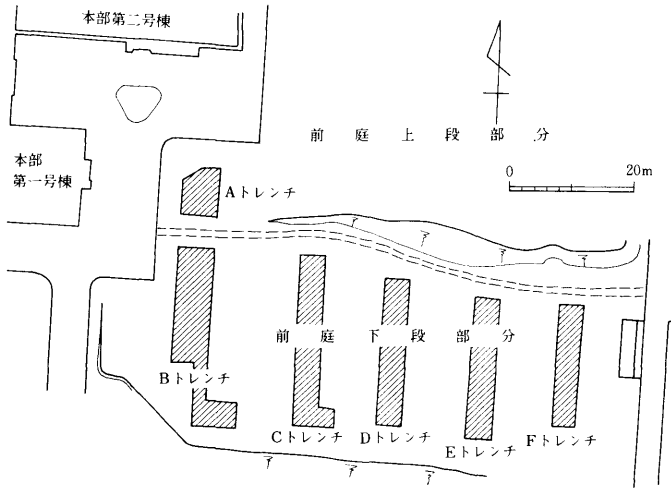


Fig. 5 トレンチ設定図

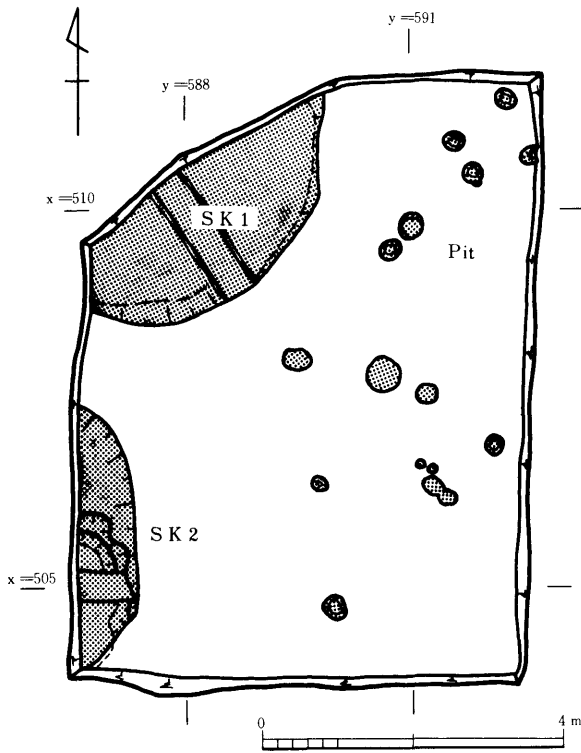


Fig. 6 Aトレンチ遺構配置図

なお、昭和60年7月下旬には環境整備委員会の視察が行われ、8月7日に埋蔵文化財資料館運営委員会、8月8日に報道関係者、一般教職員等を対象とした現地説明会を開催した。

2 層位・遺構

トレンチは現存する道や樹木を回避した地帯に6本を設定した。以下、試掘堀は西側からA・B…Fと称し、各トレンチごとに層位、遺構を説明する。なお、土層堆積状況は各トレンチ西側壁面 (Fig. 7 参照) の観察結果を記する。

(1) Aトレンチ

Aトレンチは調査対象地域の最も北西端に位置する。地表面下約60cmまでは大学設置造成時の埋土で、下に旧耕作土、床土が広がる。その直下、地表面下約90cmに地山面があり、古代・中世の包含層は既に消失していることが明らかであるが、土壌、柱穴等遺構が遺存する。

第1号土壌

トレンチ内北西隅に位置する。遺構範囲が調査区外に及ぶため全体の形状、規模等は明確にし

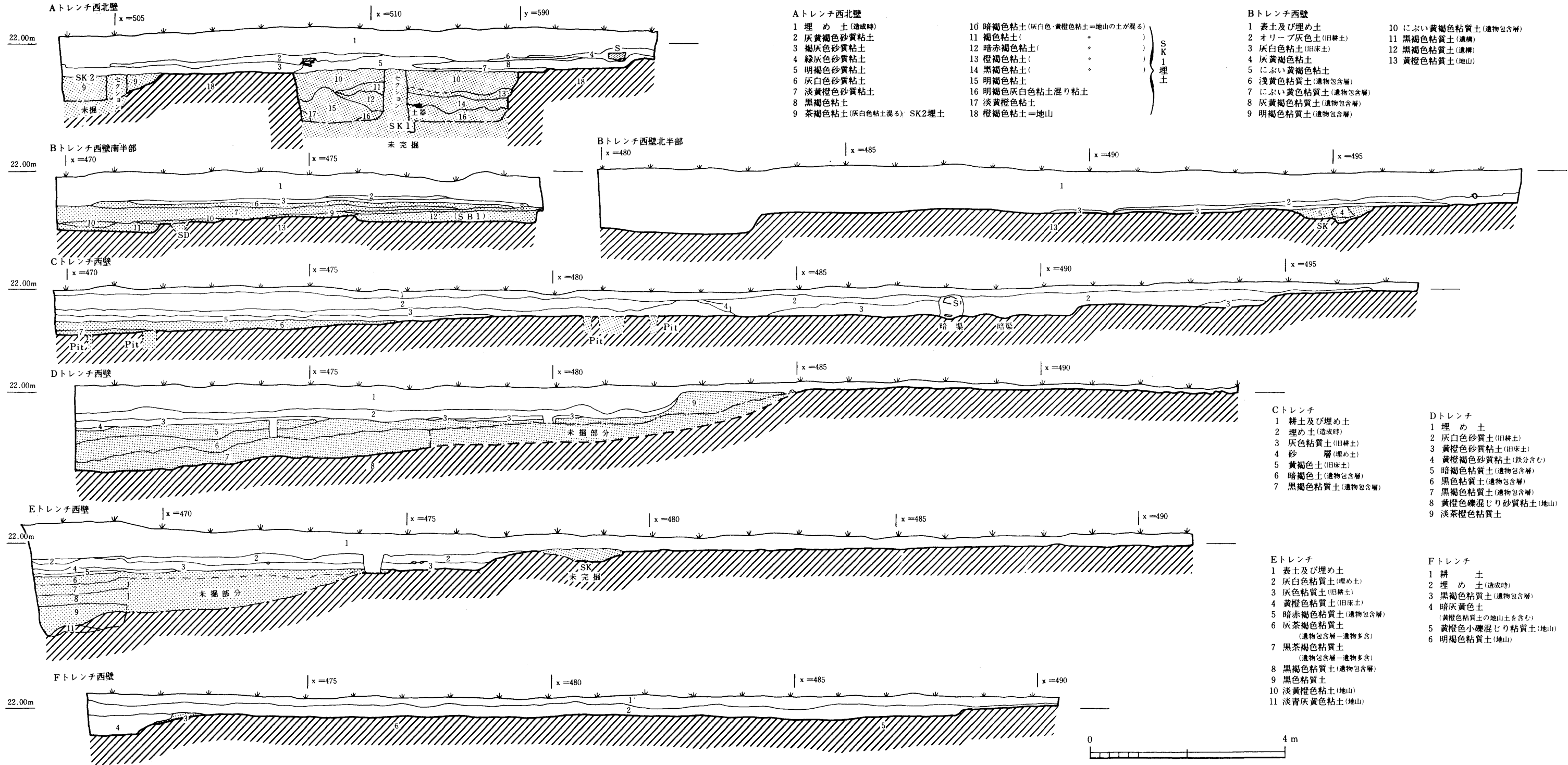


Fig. 7 土層断面図

えないが、現時点では径約4m前後を測る平面円形の土壙と推定される。未完掘のため深さ、断面形についても不明であるが、少なくとも深さ1.2m以上あり、壁面は垂直気味に内傾し掘り下がるが、一部袋状を呈する部分もある。遺構の土層堆積は上面から約1m掘り下げた間で7層の土層が認められ、いずれの土層も地山の土が小ブロックで多数混じっており、掘削調査範囲内の部分は人為的な埋め込みによるもので自然堆積ではないと考える。なお、遺構上面より深さ約70mの地点で、弥生時代中期末～後期前半の甕二個体を検出した。本土壙の機能、用途としては貯蔵用堅穴の可能性はあるが、未完掘のため断定しかね結論は将来の調査に譲る。

(2) Bトレンチ

調査対象地の西端、Aトレンチの南側に位置する。土層堆積状況は、 $x=490$ より北側では約50～80cmの埋め土があり、その直下に旧耕作土、床土が残る。その下は地山であり、遺物包含層は遺存しないものの遺構が若干散在する。 $x=483\sim 490$ の間では約80～90cmの埋め土があり、直下は地山である。また $x=483$ より南側ではさらに約30～40cm深く地山が掘り込まれている。さらに $x=480$ から南側では地表より約50～80cmの埋め土下に旧耕作土、床土があり、その下に遺物包含層が堆積する。遺物包含層の厚さは $x=481$ では約10cm程度であるが南方へ向かって漸次厚くなり、 $x=470$ では約40cmにおよぶ。

遺構は南半部に集中し、北半部では稀薄である。この要因は北半部では遺物包含層が遺存していないことから、後世の遺構面削平の度合が高いためと察し、本来の遺構分布状況を示すものではない。

第1号堅穴住居跡

トレンチ中央やや南寄りの地点に位置する。東西幅は調査区外に及ぶため不明であるが南北幅は約6.0mを測る。深さは西壁際に幅40cmのサブトレンチを設定し遺構埋土を掘り下げたところ約20cmを測る。床面は平坦で、壁溝は確認できなかったが、柱穴を検出した。埋土は黒褐色粘土の単一層である。

遺物は埋土上層から壺・甕・高坏などが出土した。時期は弥生時代後期後半。

(3) Cトレンチ

$x=477$ より北側では遺物包含層は既に削除されており、また地山面まで間に旧耕作土の層もなく大学設置造成以後の埋め土のみの部分もある。遺構面までの深さは北端部で最も浅く、現地表面下約15～20cmで地山を検出する。なおトレンチ内北側で新しい時代の造作とみられる約20cmの段差が二箇所があり、その段差は東南から北西にかけて並走する。

x=477より南側では暗褐色土・黒褐色粘質土の二つの遺物包含層が遺存し、南へ向かって地山の下降に伴い漸次厚くなる。なお南端部において遺物包含層上面までは表面下約60～70cm、遺構面までは約90cmを測る。

遺構は中央部分から南側と北端部付近に遺存し、近年の造作とみられる段差の下段部分ではその削平のため遺構の分布は稀薄である。トレンチ内南端部東側ではD・Eトレンチでも認められる不明土壌の上端が確認できた。

第3号土壌

トレンチの北端部に位置する。平面は円形を呈し、長径 212cm×短径 208cmで、床面積約 3.45㎡を測る。土壌の断面形は壁面が底面から外傾ないし垂直に立ち上がる部分や、袋

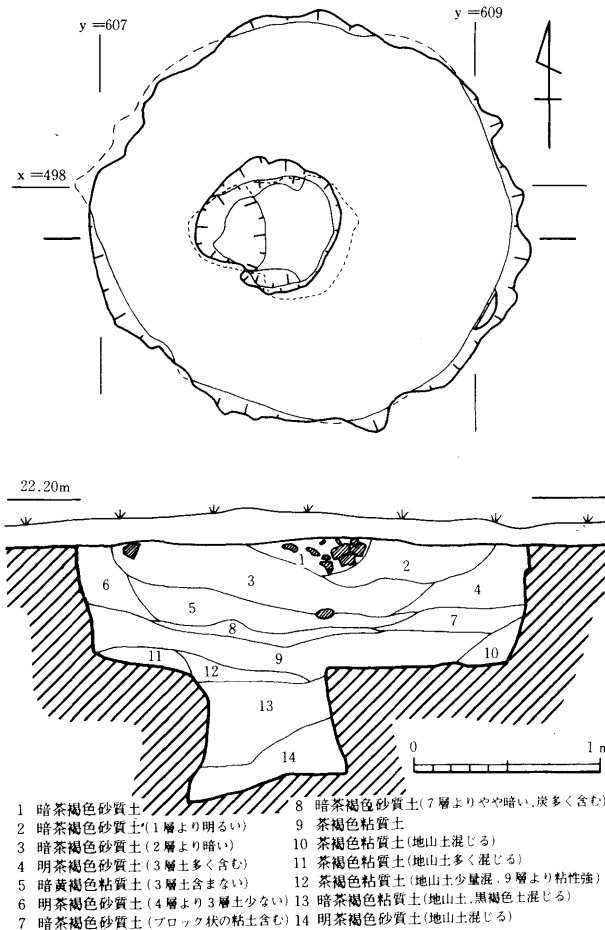


Fig. 8 第3号土壌実測図

状を呈する部分があり、一様でない。ただし本例の場合、上面から床面までの深さが平面の大きさに比べて浅いこと、また現地形の状況からも勘案して、現状において上部がかなり削除されていると考えられること、さらにまた下関市綾羅木郷台地遺跡などでは、床面積 3.0㎡以上のもののほとんどが袋状の断面形を呈する事実があることから、本竪穴に関してはいわゆる袋状竪穴であった蓋然性が高いと察する。床面は平坦ないしは中央に向かって内傾している。貼床の痕跡は認められなかったが、床面中央部分に長径 70cm、短径 66cmで、深さが最大 70cm、最小 56cmを測る Pit を造作している。

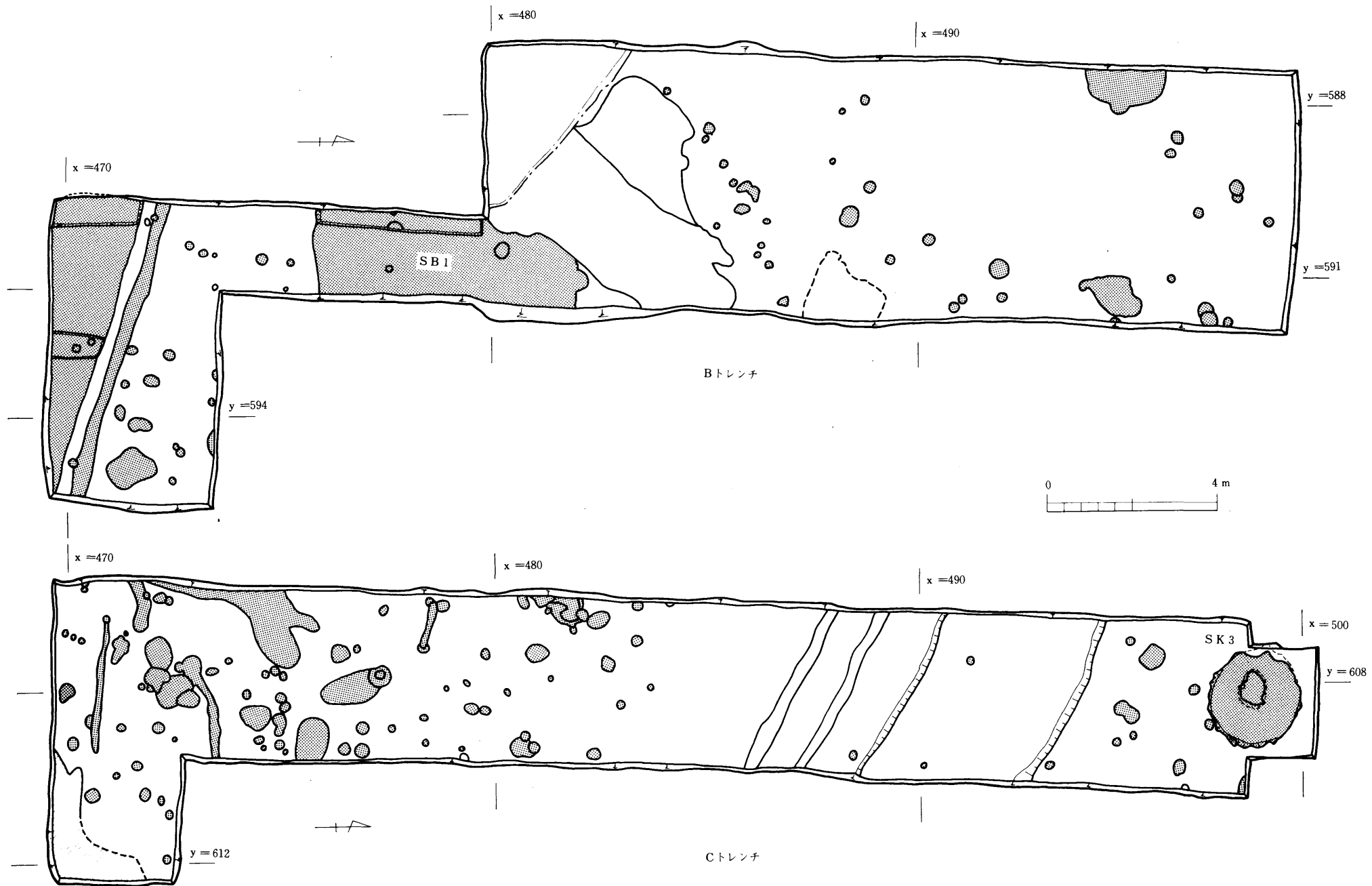


Fig. 9 B・Cトレンチ遺構配置図

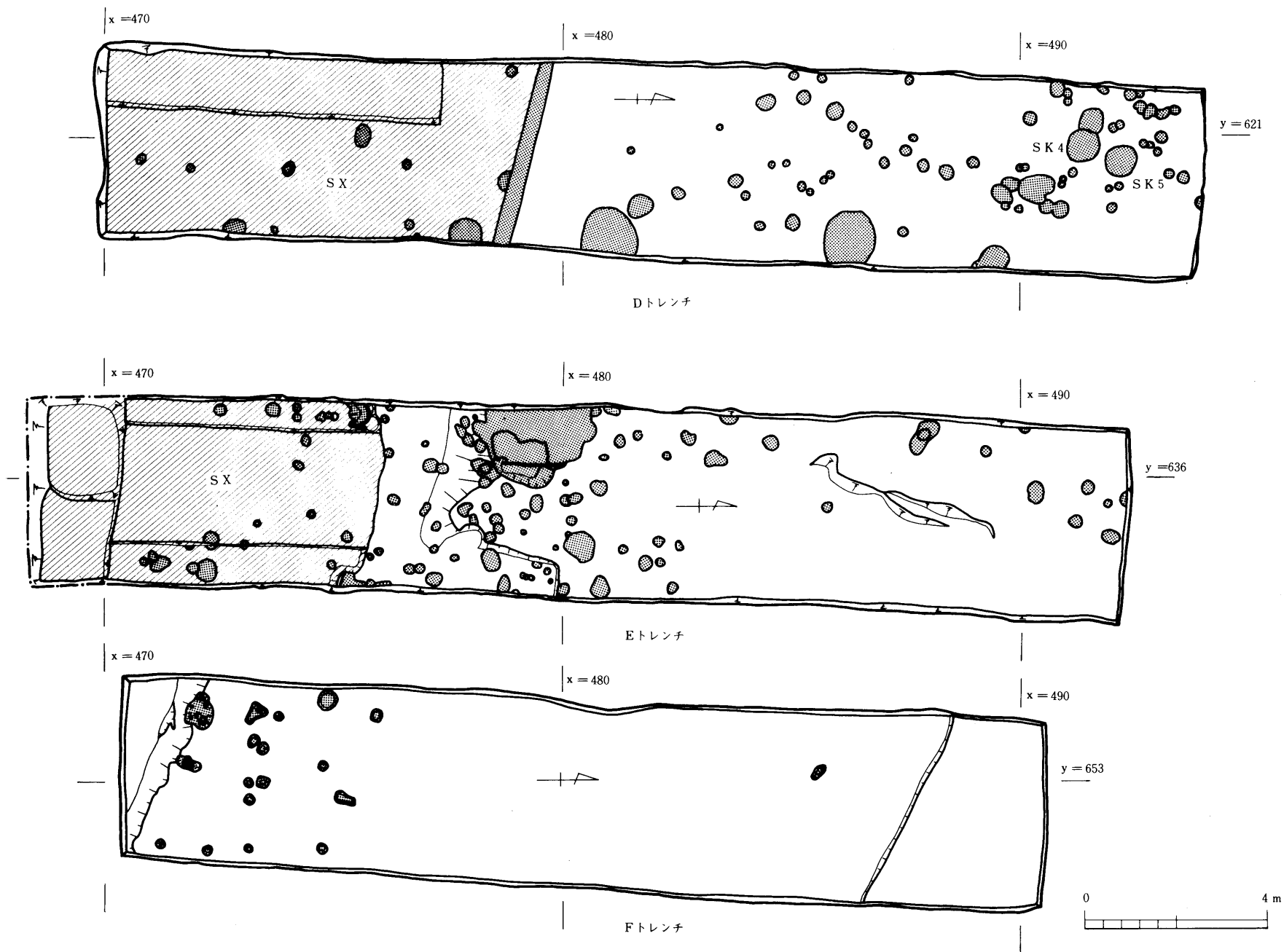


Fig. 10 D・E・Fトレンチ遺構配置図

層位・遺構

遺構内の土層堆積は、上面から床面まで12層の砂質土、粘質土に分けられる。遺物は、1層で小中型の石類と弥生時代前期末および中期初頭の土器片が充填した状況で検出され、人為的な埋込によるものと考えられる。また2層、3層、6層で弥生時代前期後半の土器を若干包含したが、それ以外の層では出土遺物は稀少であった。なお、8層には炭が多く混入していたが、それが原位置での焼成によるものか、二次的堆積かは不明である。床面 Pit は、埋土が砂質土、粘質土の上下2層に分かれるが、遺物は皆無である。

(4) Dトレンチ

調査対象地のほぼ中央部に位置するトレンチである。土層堆積は、 $x=485$ より北側では約10～20cmの表土下は直ぐに地山である。地山面はほぼ水平で、後世の削平を受けている。 $x=485$ より南側には不明土壌があり、地山面が緩やかに南に向かって傾斜していき、トレンチ南端部では深さ約1.7mにおよぶ。その間は上部に厚さ約50cmの埋め土、約20～30cmの旧耕作土、床土があり、以下遺物包含層の粘質土層が堆積する。

遺構は、 $x=485$ より北側ではすべて地山面で検出された。遺構の数は比較的多くみられるが、土壌などは近世以降のものが多い。 $x=485$ より南側では遺物包含層の一つでもある黒褐色粘質土の上面で柱穴などの遺構が確認され、遺構面が少なくとも二面以上ある可能性が推定しえる結果が得られたものの、地山面で柱穴、溝等の遺構が遺存するかについては地山までの掘削範囲が少ないため断定しかねる。

第4・5号土壌

径約70～75cmの平面円形の土壌で、両者とも素焼きの大型の甕が出土した。第5号土壌の方では底部を打ち欠いたものが設置したままの状況で検出された。時期はいずれも近世と推定し、用途として耕作に伴う肥料だめの可能性が考えられる。

不明土壌

$x=485$ より南側に広がる大きな落ち込みである。南端部では現地表面から深さ約1.8mにもおよび、さらに南に向かって下がっている。この不明土壌はC・Eトレンチでも確認され、かなり大規模なものであることが推定できる。検出確認範囲が部分的なため、現時点において性格・機能については断定しかねるものの、一推定として旧地形における谷頭先端部分とする考えがある。

(5) Eトレンチ

$x=478$ から北側の範囲では、厚さ約20～30cmの置土下はCトレンチ北側部分と同様に直ぐに地山面であり、南側では置土の下に旧耕作土が広がる。 $x=475$ より南には不明

土壌の落ち込みがある。

遺構の分布状況は、両端部まで広い範囲で認められる。なお北東部分に空白部分があるが、この部分は大学設置造成時と思われる削平のため、既に遺構が消失したと考える。遺構は、 $x=475$ より北側ではすべて地山面で検出された。南側では不明土壌の埋土となっている包含層中において、柱穴の掘り込みが認められ、幾つかの遺構面が存在することを確認できた。

(6) Fトレンチ

調査対象地最東部に位置するトレンチである。地山面までの土層堆積はトレンチの範囲すべて表土および埋め土であり、遺物包含層は南端部の一部で若干遺存するのみである。北端部と南端部で大学設置造成時の造作と考える段があり、地山面までの深さは北端部で約15cm程度、南端部の最も深い所で約85cmを測る。

遺構は南端部付近に残存し、すべて地山面で検出された。中央部から北側での遺構は後世の削平のため消失したと考える。遺構の種類は柱穴であり、埋土掘削の結果、弥生時代・鎌倉時代のものがある。

(森 田)

3 遺物

(1) 遺構出土の遺物

確認した遺構は、Fトレンチのみ完掘し、A～Eトレンチ内ではほとんどを検出しただけの段階にとどめ再び埋め戻している。そのため、遺構に伴う遺物もその全容を示すには至らないことをご了承願いたい。

Aトレンチ第1号土壌出土遺物 (Fig. 11, PL. 13-(1))

1、2ともに甕で、かなり風化している。1はおそらく斜上方に強く屈曲する口縁と、丸底に近い平底をもつものであろう。粘土継ぎ目での剝離が著しく、器壁にも継ぎ目がはっきり現れる。内面横方向、外面縦方向の刷毛目が認められる。2は底部を欠くがほぼ完形に復原できた。外面は縦方向の刷毛調整で頸屈曲部に指頭痕が顕著に残る。器壁が薄く、内面は摩耗のため調整不明。1、2ともに外面には煤が付着。他に中期の遺物片を若干含み、弥生時代中期末～後期前半に比定できよう。

Bトレンチ第1号竪穴住居跡出土遺物 (Fig. 12・13, PL. 13-(2)・17-(1))

土器 (Fig. 12) 壺、甕、高坏が出土した。他の遺構に比べ風化の激しいものが多い。特に1・4などは器表の保存状態が悪く剝離が著しい。

遺 物

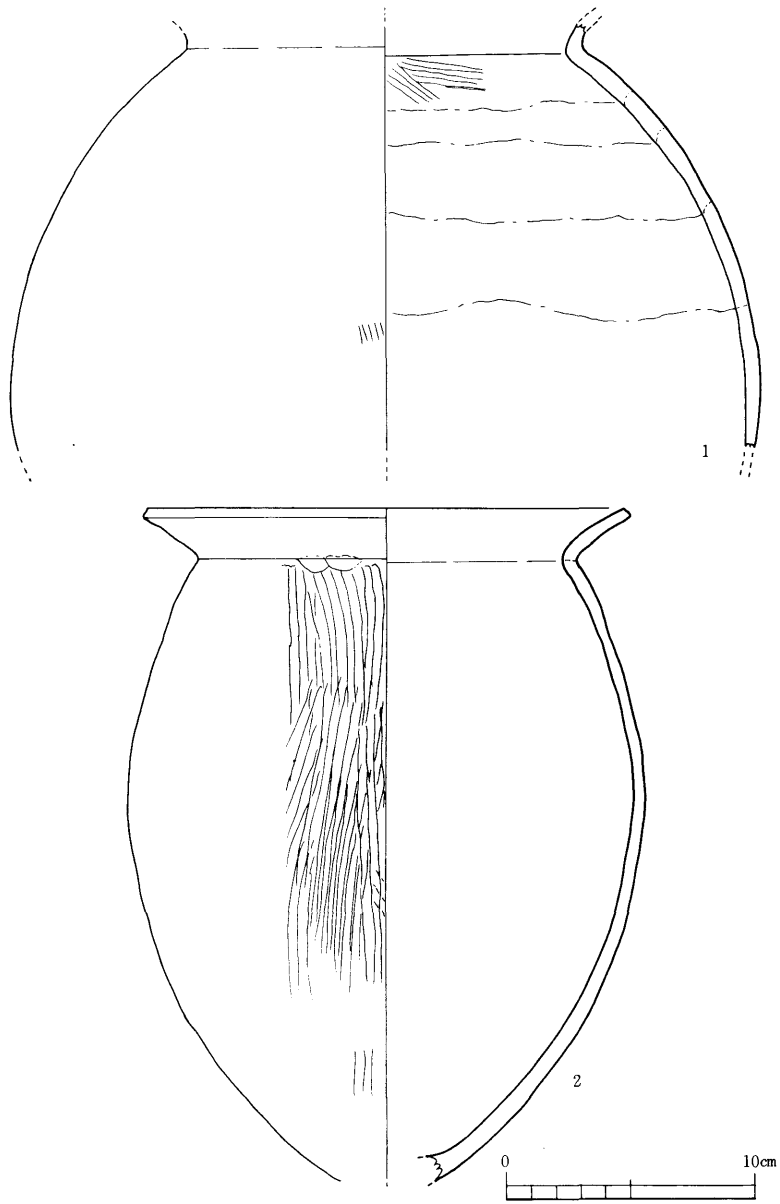


Fig. 11 Aトレンチ第1号土壙出土遺物実測図

1・2は壺頸～肩部。1は外面にわずかに斜め刷毛が観察できる。粘土継ぎ目での剥離が著しく、肩部内面は器表も剥げ落ちている。2は器壁が薄く、頸部突帯の上半と下半にそれぞれ逆向きの刻みを巡らせるが、上下は対応しない。3は壺口縁部。このタイプの複

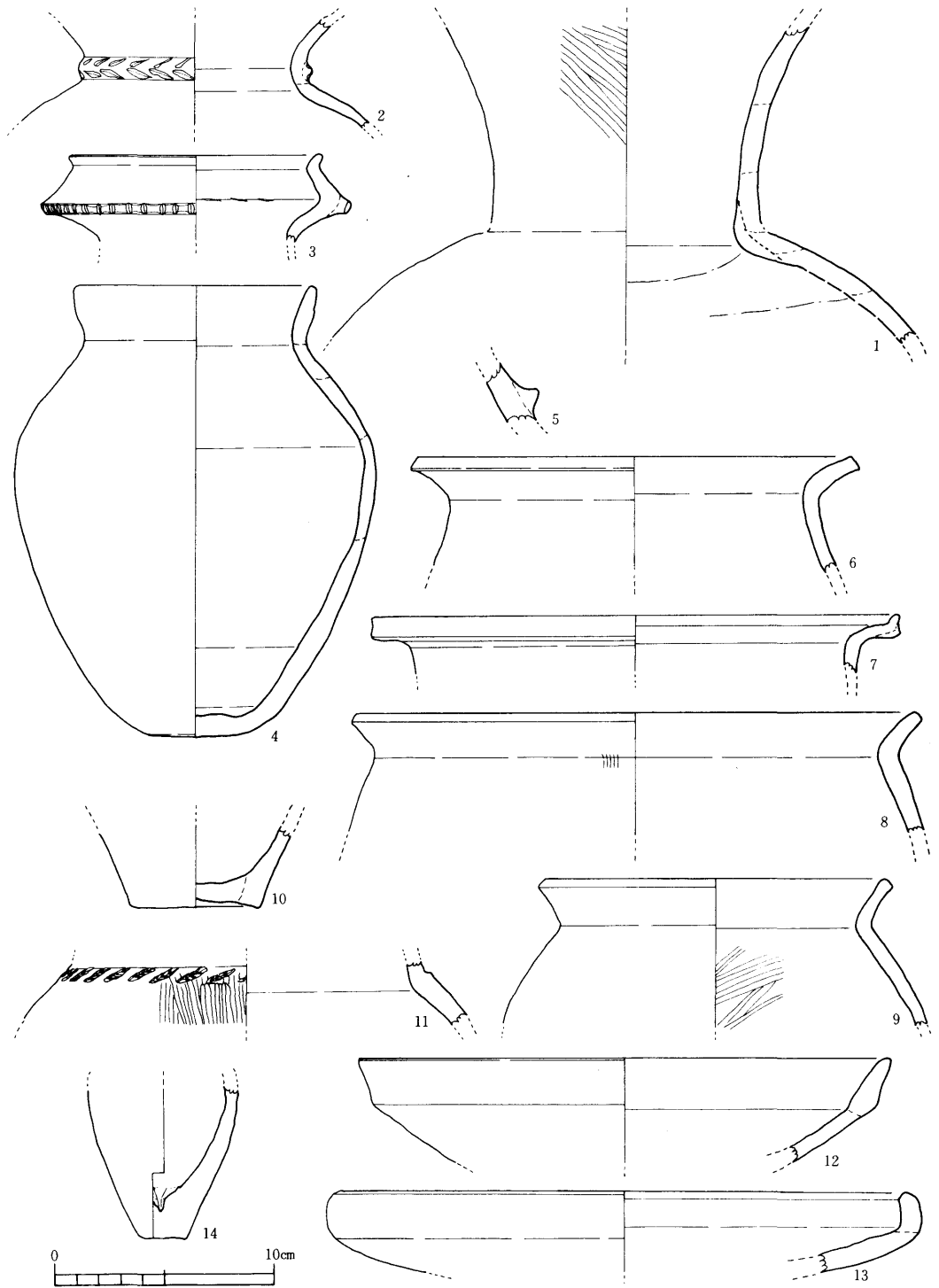


Fig. 12 Bトレンチ第1号竖穴住居跡出土遺物実測図（土器）

合口縁壺にしては小ぶりである。屈曲部の外面には突帯状に粘土紐を貼り付け刻みを入れ、内面には指頭痕や爪痕が残る。全面横ナデ仕上げ。4は完形に復原できた壺で、半身を欠いた状態で出土した。

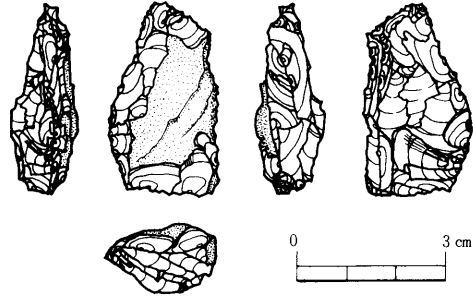


Fig. 13 Bトレンチ第1号竪穴住居跡出土遺物実測図（石器）

口縁中位はやや膨らみ、胴部最大径付近の器壁が特に薄くなっている。

器表の剥落が著しい。5はおそらく壺肩部上位の突帯部分。壺は、他に丹塗りの破片もあるが図化できない。

6～11は甕口縁部。6はあまり張らない胴から緩やかにカーブしてやや外反する口縁部にいたり、端部にはしっかりした面を作る。7は跳ね上げ口縁をもつ。8は口径の割に口縁が短く、屈曲部はやや甘い稜をつくる。9は他に比べ堅緻で、かなり張る胴になるもの。内面は斜め刷毛。10はやや上がり気味の平底の底部。内面強いヘラナデ、外底面不整ナデ。胎土中の長石粒が器面に浮いているのが目立つ。11は肩部で、外面縦刷毛の後刷毛原体で刻みを施す。内面はヘラナデ。

12・13は高環口縁部。12は屈曲部が肥厚し、端部は面をなさない。13は盤状の環部をもつもので、立ち上がりの部分を貼り付けている。

14は、高環脚部とするには内彎しすぎており、おそらく小形の壺の体部ではないかと思われるが、内面に明確なシボリ痕がみられ疑問が残る。二次的な火熱による赤変が認められる。

石器（Fig. 13） 1点のみの出土。

やや濁った水晶（石英）の縦長剥片を素材とする二次加工のある剥片で、先端部を欠損する。正面左側縁が刃部にあたるものと思われるが、上半部のパティナは古く、使用時の剥離痕と思われる。正面側の調整剥離は裏面に比べてやや急傾斜である。裏面は上方向からの打撃がうまく抜けず、階段状の剥離を起こしており、素材の高まりを除去するように、やや大きな粗い加工痕が認められる。正面右側縁は不定方向からの剥離作業による剥離面によって構成されている。

以上、第1号竪穴住居跡からは、若干中期の遺物を含むが、ほぼ後期後半を中心とした遺物が出土した。石器は流れ込みの可能性がある。

C トレンチ第3号土壌出土遺物 (Fig. 14・15, PL. 14-(1)・17-(2))

土器 (Fig. 14) 壺と甕のみ出土した。

1は口縁と頸との境に段を削り出す壺で、内面は横方向のミガキ、外面は横ナデ。2は1同様の段をもつ壺で、口縁端部に刷毛原体により1条の沈線を施す。3は壺頸部。注口風の内部突帯を貼り付ける小型品で、内面には指オサエによる稜が残る。内面横ナデ、外面刷毛後ヘラミガキ。4～7は壺肩部片。4は、頸との境に段を削り出し、肩にタマキガイで施文。文様は木葉文になるものと思われる。内外面ともミガキ。5は内外面ミガキ後横ナデで、無軸の羽状文をタマキガイにより施す。6の内面は刷毛後ミガキだが粗い。外面は胴にM字形突帯を貼り付け、同じくタマキガイにより沈線と有軸羽状文を施文する。7は外面刷毛後ミガキ。列点はミガキの前に施されており、列点を避けてミガキをかけるため、列点周辺のみ縦刷毛が顕著に残る。

8・9は甕口縁。8は張りのない胴から如意形の口縁へと続くもので、端部には退化した刻みが入る。内面は丁寧なナデ、外面縦刷毛後横ナデ。9は短い口縁部がほぼ直角に近く外反する。内外面とも刷毛目が顕著に残るが、それぞれ異なる原体を使っている。

10～14は底部で、10・13・14は甕、11・12は壺になるものと思われる。10は器面荒れがひどくほとんど剥落しているが、わずかに残る底部外面は二次的火熱により赤変している。11はどっしりした平底で、内面は強くナデている。12は低い上げ底で、内面は粘土継ぎ目で剥離しており外面は太い刷毛目が残る。13・14は上げ底のもので、ともに内底面は指オサエ痕明瞭。13は14に比べ底部がややふん張る。内面ミガキ、外面縦刷毛で、煤多量に付着。14は13よりも上げ底がきつい。内面ナデ、外面縦刷毛後ナデ。

石器 (Fig. 15) 打製石斧1点のほか、石核、剥片、および用途不明石製品がある。なお、図化しなかったが、加工痕のないチャートとメノウの小円礫も出土している。

1は扁平な打製石斧で下半部を欠損する。刃部と頭部の区別が困難であるが、掘り鉋としての機能をもつものであろう。正裏両面とも自然面を大きく残しているが、正裏両面上半部では節理面での剥落痕が著しい。また、ほぼ全周縁に粗い調整加工が施されているが、左右両側縁中央部はノッチ状の剥離痕が認められる。

2は用途不明の石製品として図化したが、顕著な加工痕が認められず、単なる自然転円礫の可能性もある。器表は極めて滑らかで、中央左寄りに径約3.5cm、深さ約0.7cmの円形の凹みがある。意識的に使用したとすれば、性的シンボルの機能をもつものかもしれない。

3は大形の石核で、剥片剥離作業は裏面を除く各面で行なわれているが、正面上半部、

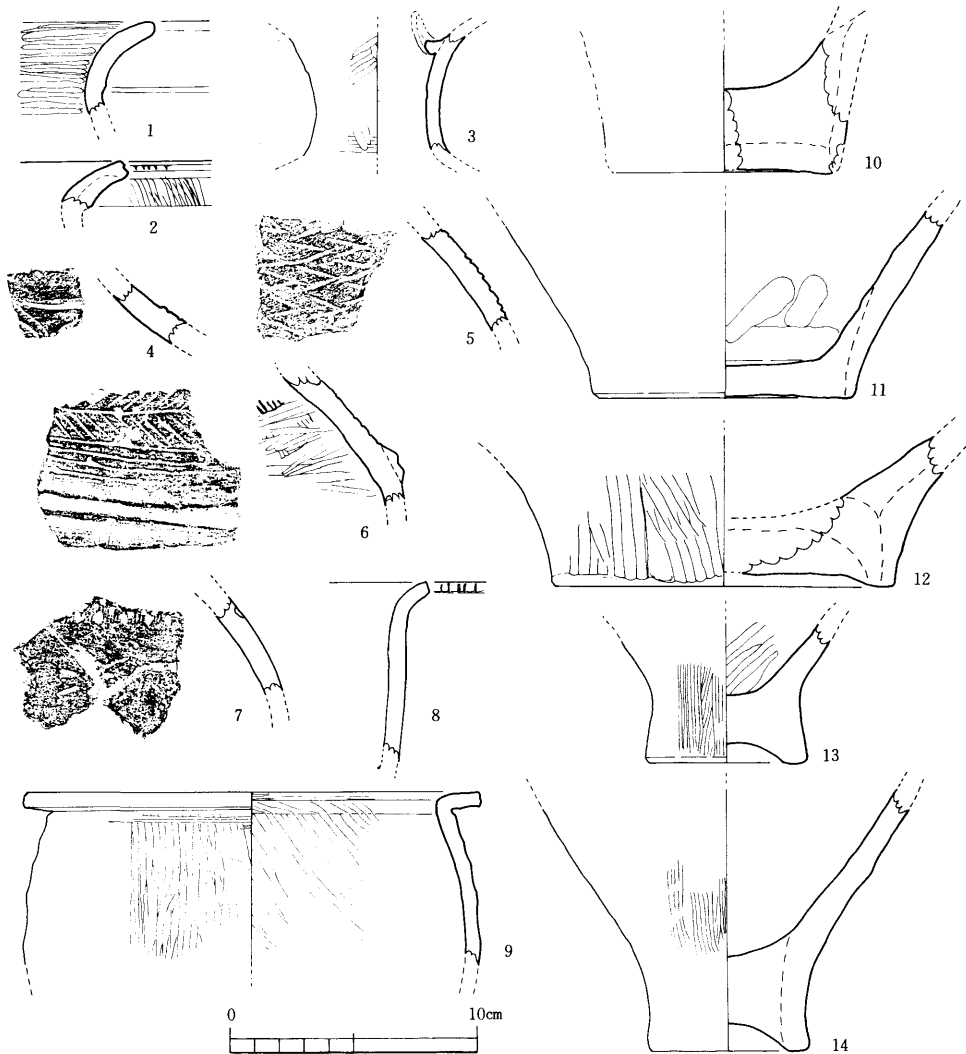


Fig. 14 Cトレンチ第3号土城出土遺物実測図（土器）

左側面上端部および裏面に自然面を残しており、剥離作業はあまり進行していない。打面を頻繁に転位する石核で、石核正面および下面の剥離作業は主に右側面を打面とし、左側面は底面および裏面側を、上面は裏面および右側面を打面としており、全体の形状は直方体に近い。打面はいずれも複剥離面である。最大幅5～6cm前後の縦長もしくは横長の剥片を目的剥片とする。珪質凝灰岩。

4・5はおそらく3の石核を母岩とすると思われる剥片であるが、接合はしなかった。

4は横断面三角形を呈する厚手、大形の縦長剥片で、正面左半部に自然面を残す。正面左側縁はヒンジフラクチャー気味になっている。上面には複剥離打面を残し、裏面は主要剥離面である。5は正面に自然面を残す横長剥片で、下端部には使用時のものと思われる剥落痕が認められる。6～12は剥片。6は裏面が主要剥離面であるが裏面右方向からの加撃によってネガティブバルブを除去している。7は裏面を主要剥離面とし、裏面右側縁に打面が残存する。正面上半部に自然面を残しており、下半部は右側縁を打面とする小さな剥離痕が認められる。8は自然面の残る上面を打面とし、正面側が主要剥離面である。正面右側縁下半を中心に細かな剥落痕が認められ、使用痕の可能性はある。9は裏面が主要剥離面で、剥片剥離後、自然面の残る正面下端部に打面調整を加え、正面側からの加撃によって素材の打面を除去している。10は裏面が主要剥離面で、自然面である裏面右側縁に打面が残存する。裏面左側縁は剥片剥離後、裏面を打面とする剥離面が形成される。正面上半部には右側縁方向からの槌状の剥離痕が認められる。11は不定方向からの加撃による剥離面をもつ。正裏両面中央部には稜を有する。12は寸づまりの縦長剥片。裏面側が主要剥離面で、正面上縁に打面が残る。正面左側縁下半には裏面からの加撃による幅広の加工痕が認められる。6～10は黒曜石で、6は不純物が多い。11は水晶、12は讃岐岩質安山岩。

チャート小礫は、最大長1.9cm、最大幅1.5cm、最大厚0.8cm、重さ1gでえんじ色。メノウ小礫は最大長2.5cm、最大幅1.3cm、最大厚0.9cm、重さ4gで橙色。ともに人為的な加工痕はなく自然礫と思われるが、石器原材の可能性もある。

第3号土壌の土器は弥生時代前期末～中期初頭のもものが混在し、層位的な時期差を認めない。石器剥片は、すべての個体が自然面を残している。黒曜石には姫島産のものがなく、包含層から姫島産黒曜石の原石や剥片が出土しているのと対照的である。珪質凝灰岩のものは、剥片2点と石核1点が出土しており、接合はしなかったが、一次的な剥離時の剥片の大きさを示す資料として注目される。

動物遺体・植物遺体

第3号土壌北半部において、床面から約10cmまでの埋土（ほぼ9層以下に対応する）を取り上げ水洗した。以下、農学部講師宇都宮宏氏による鑑定結果報告を記す。

出土した動物遺体と植物遺体は、各々一体ずつであった。

動物遺体は頭部1と翅2が各々分離して出土しているが、同一個体のものと見られた。鑑定の結果、甲虫のオオヒラタシテムシ（*Eusilpha japonica* Motschulsky）の雌である。このオオヒラタシテムシは現在各地に多数生棲しており、動物の腐敗物に集まる虫である。

遺物

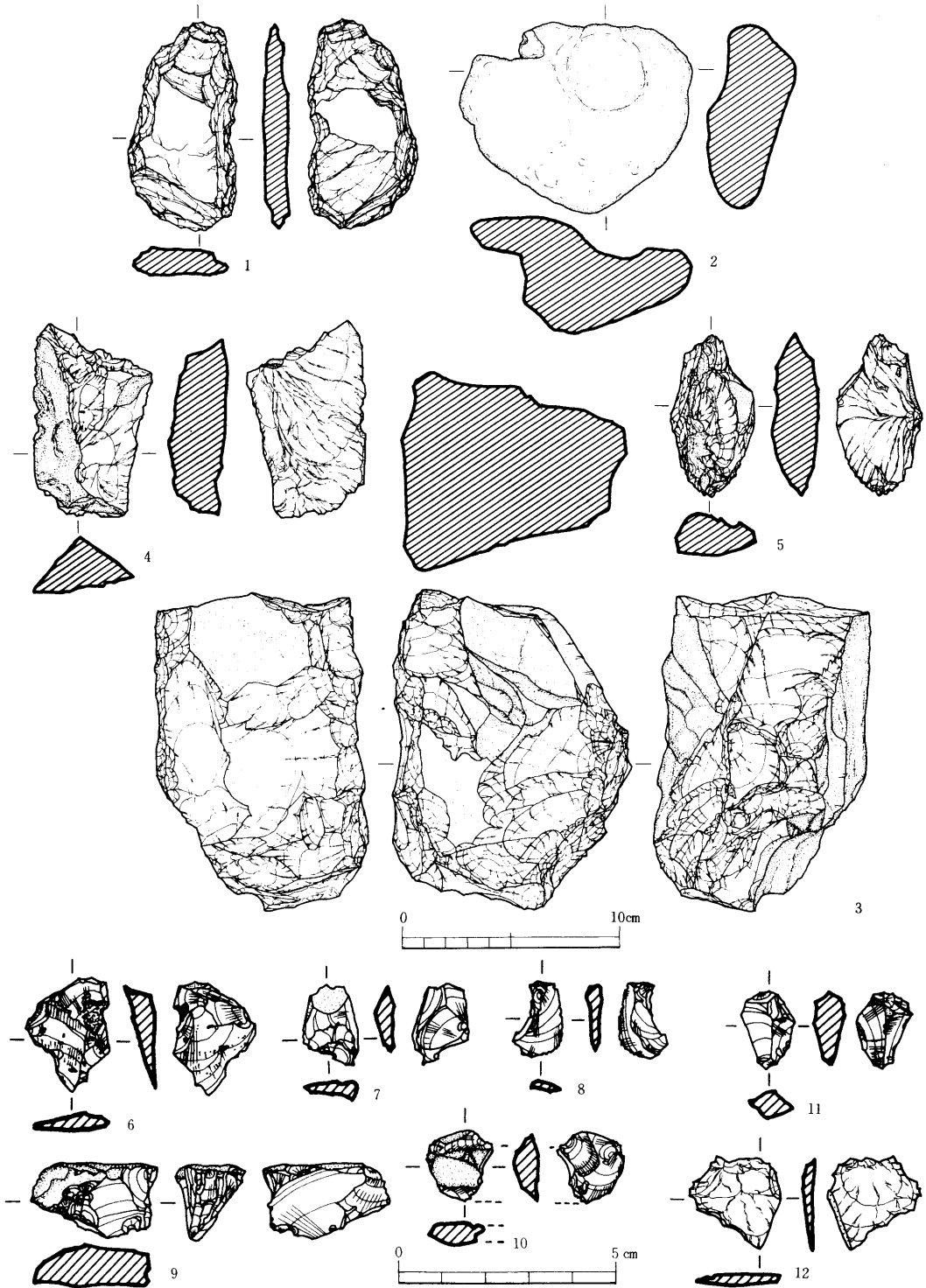


Fig. 15 Cトレンチ第3号土坑出土遺物実測図(石器)

植物遺体は果実（種子）と翼が離れて出土しているが、同一のものと考えられ、鑑定の結果、イロハモミジ（*Acer palmatum* Thunb. subsp. *palmatum*）である。果実内の内容物は充実しておらず、不稔状態である。すでに鮮新世（150～1000万年前）時代の化石が出土している。

Dトレンチ第4号土壌出土遺物（Fig. 16, PL. 14-（2））

埋甕の口縁部と思われる。口縁は肥厚し、内面に段をもつ。端部は水平に作り、外面口縁下に1条の沈線を施す。胴部内面は風化により調整不明、あとは刷毛のちナデ。

Dトレンチ第5号土壌出土遺物（Fig. 17, PL. 14-（3））

1は埋甕。幅5～6cm前後の粘土帯を積み上げて成形し、器壁は7～8mm程度と薄い。内面は刷毛の後ナデを施しており、木口を使用した当て具痕も残るが、刷毛と当て具の前後関係は不明。外面は風化が著しく調整不明。

2～8は埋甕内検出遺物。2は須恵器碗の底部。内面見込みに沈線状の段を有する。3・4は土師器皿。3は器壁が薄く、底部外面は糸切りで板目が残る。内面中央には煤のようなコゲが付着しており、灯明皿かと思われる。4は坏になる可能性もある。5・6は焙烙^{ほうろく}で、5は土師器、6は瓦質土器。ともに、底部内外面と口縁端部付近に煤が付着している。5は外面に指オサエ痕が著しい。7は陶器甕の口縁部。内面に縦の筋目が残るが全体に丁寧な回転ナデ。8は染付磁器の底部。釉はやや厚めに全体にかけ、畳付部はカキ取るが、高台外面は釉が垂下しきらず、露胎のままの部分もある。

Fトレンチ柱穴出土遺物（Fig. 18, PL. 14-（4））

1は弥生土器の壺で乳頭状の底部をもつ。風化が著しいが、底部内面にわずかにクモの巣状の刷毛目が残る。器壁が非常に薄く、おそらくケズリを行なっているものと思われる。2は土師器の甕口縁部。頸部から内彎しながら立ち上がり、端部は外反する。布留式の範疇におさまるものであろう。風化のため調整不明。3は鎌倉時代の土師器皿ではほぼ完形品。外面体部下位を一旦凹ませて、上半をやや内彎気味に引き上げる。底部は回転糸切り。

（2）包含層出土の遺物

土器（Fig. 17・18, PL. 15・16） 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶磁器、ミニチュア土器、土錘が出土した。

縄文土器（Fig. 17-1～5）

1～4は器種不明の破片で、内外面に条痕をもつ。内面は、その後ナデているが、1・2は大変丁寧で、3・4は雑である。5は粗製の深鉢口縁部で、内外面条痕を施した後内

遺 物

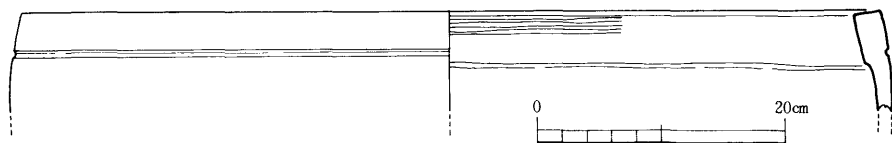


Fig. 16 Dトレンチ第4号土壙出土遺物実測図

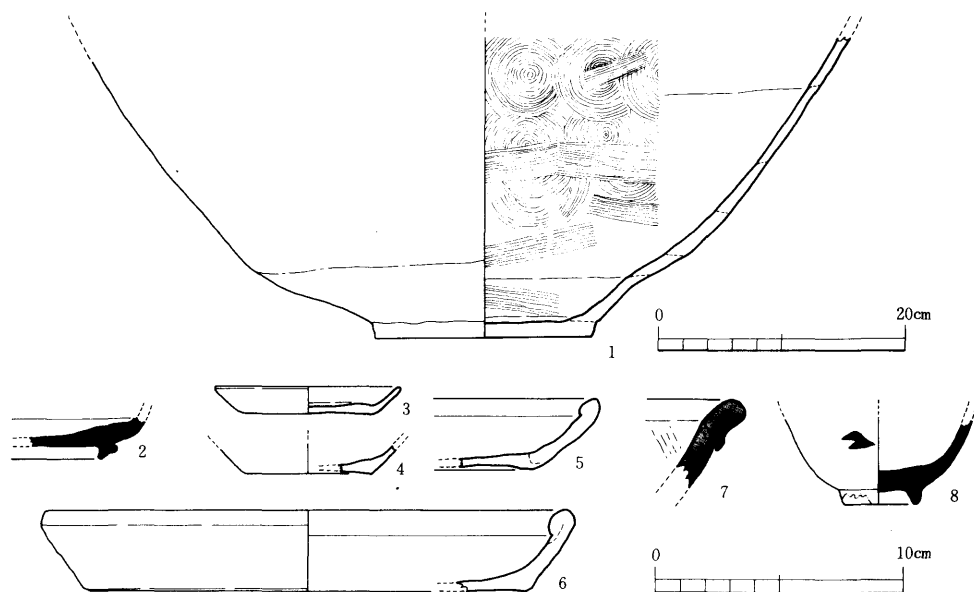


Fig. 17 Dトレンチ第5号土壙出土遺物実測図

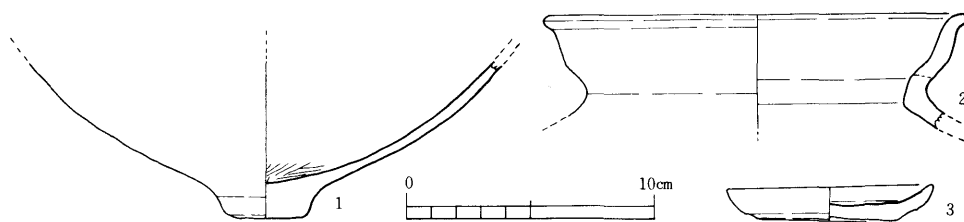


Fig. 18 Fトレンチ柱穴出土遺物実測図

面は丁寧なナデ。口縁端部には面を作り、その際に余った粘土を外面に折り曲げなでつけている。1・3はDトレンチ出土、5はDトレンチ南端第6層上層出土、2はFトレンチ出土、4は不明。他に、Dトレンチより風化の著しい破片がもう1片出土している。

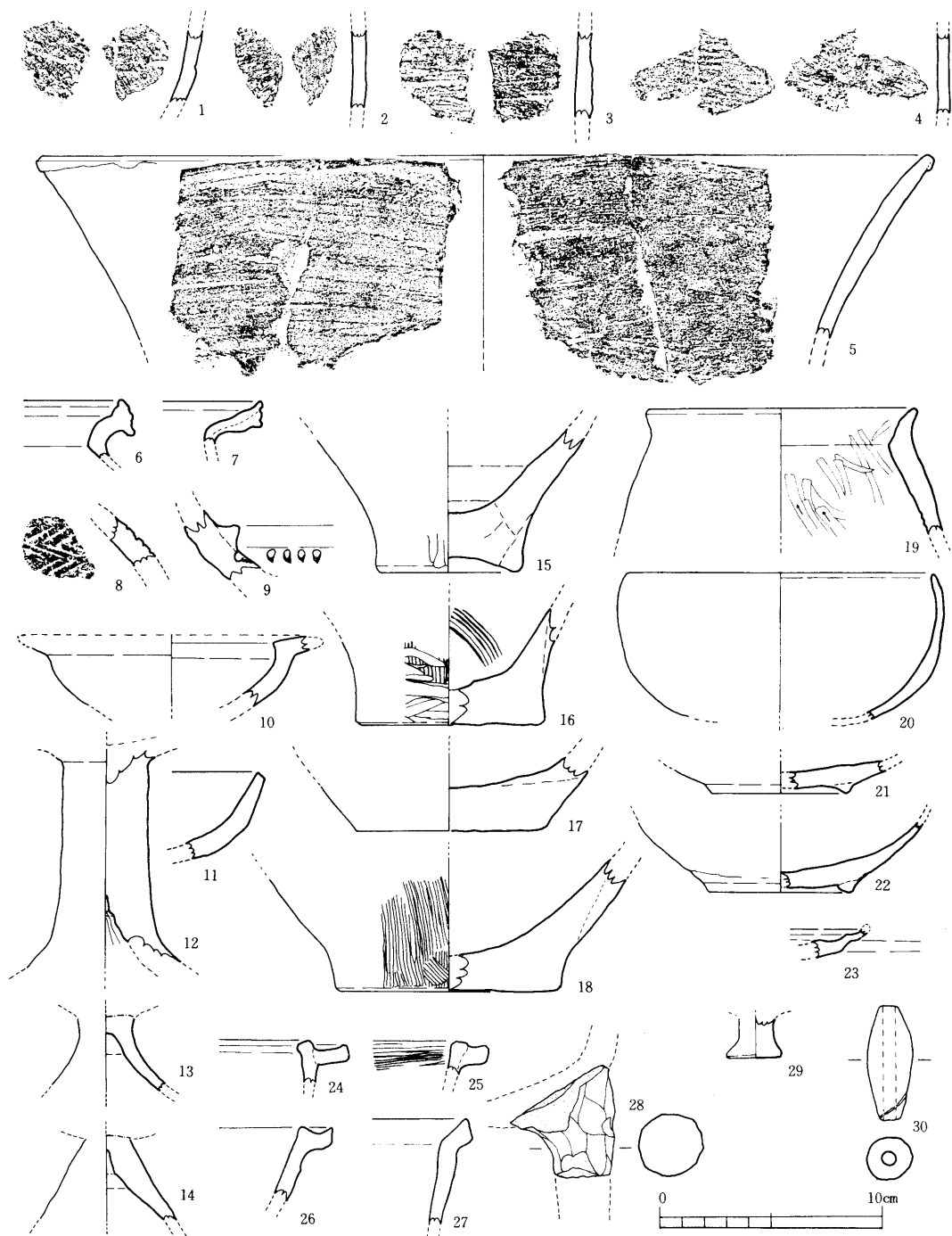


Fig. 19 包含層出土遺物実測図 (縄文土器・弥生土器・土師器・瓦質土器)

遺 物

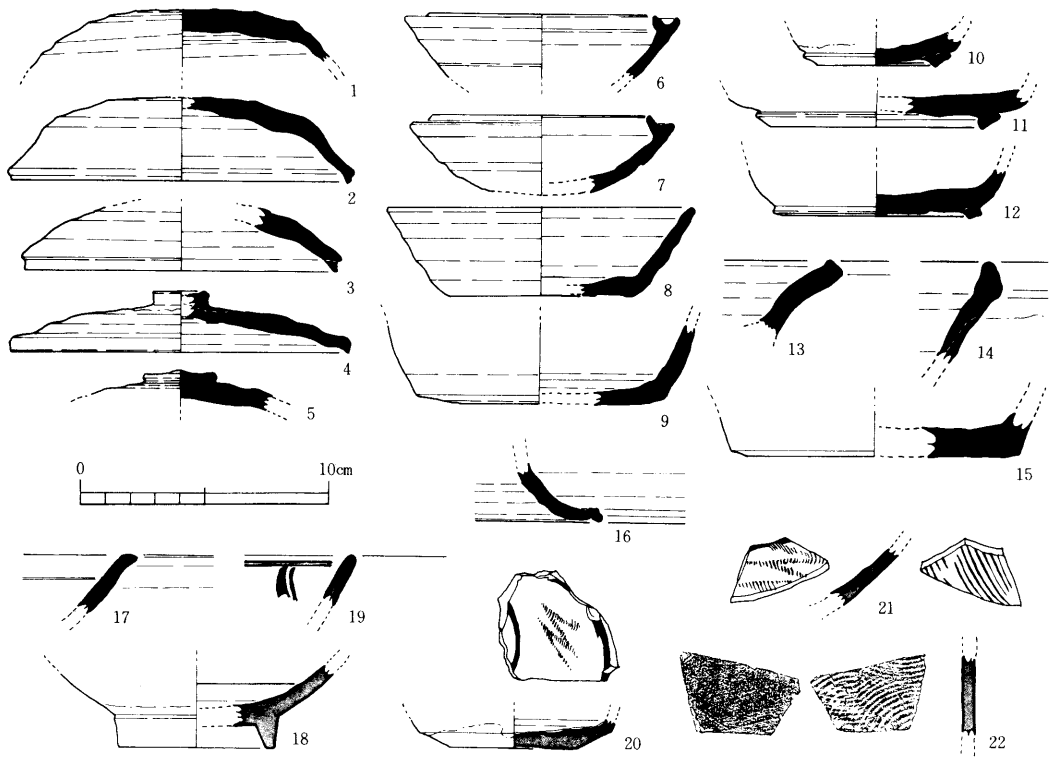


Fig. 20 包含層出土遺物実測図 (須恵器・磁器・陶器)

弥生土器 (Fig. 17-6~18)

6・7は甕口縁部。6は頸部が稜をもって屈曲し、口縁端部は上下に拡張しその外面に甘い凹線を巡らす。風化によりはっきりしないが、2条ないしは3条であろう。瀬戸内要素が強い。7は端部を肥厚させて上に引き上げ、外面に沈線を2条巡らせる。内外面とも丹塗りの痕跡が残る。8はタマキガイ腹縁により羽状文を施す壺肩部片。9も同じく壺肩部で、尖頂突帯を貼り付ける。列点は、刺突した後工具を下にずらす、引き抜く際に階段状の痕跡が残っており、粘土がかなり乾いてから施文したことが窺える。

10~14は高坏。10・11は坏部で、10は端部を欠損するが、上部で屈曲してほぼ水平に伸びる口縁をもつもの。11は端部に面をもち、内外面丹塗りであるが剥落が著しい。12~14は脚部で、すべて貼り付け法による接合痕を残す。12は脚上部が長く伸び内面はシボリ明瞭。13・14は坏との接合部からすぐに脚が開くもので、13は内面横ナデ、上部に指オサエ痕を残す。14は内面縦ナデ、上部にシボリ痕が残る。

15～18は底部で15・16は甕、17・18は壺。15は上げ底で外面ミガキ。16～18は平底。16は内外面刷毛調整の後、外面はミガキだが粗く、刷毛が残る。17は他のものに比べ非常に堅い。18は外面に縦刷毛が顕著に残る。

6・8・12～14・17・18はFトレンチ出土、7・9～11・15・16は不明。

土師器 (Fig. 17-19-23)

19は壺口縁部で、丸底になるものと思われる。内面ヘラケズリ。20は腕で、体部が大きく内彎し、口縁は内傾して終わる。21・22は高台付きの壺で、21は内黒の黒色土器の可能性はある。22は丸みのある高台を貼り付け接合痕を残すが、高台と体部の境は不明確。23は皿になる。おそらく口縁端部は丸く終わり、畿内系の「て」の字形口縁をもつものではないかと思われる。周防国防跡で出土するものは、平安時代末から鎌倉時代初頭に比定されている。²⁾19・21～23はFトレンチ出土、20はDトレンチ出土。

瓦質土器 (Fig. 17-24-28)

24～27は鍋の口縁部。24・25は周囲に鏝を貼り付けるもので、26・27は端部を外側に屈曲させるもの。25の内面に横刷毛を認めるほかは、残存部を見るかぎり横ナデ調整。27は外面に煤付着。28は同じく鍋の脚で、鍋底に接合していた部分。一部に二次的火熱による赤変がみられる。24はDトレンチ出土、25～28は不明。

ミニチュア土器 (Fig. 17-29)

おそらく高坏を意識したもので、坏部を欠損する。Fトレンチ出土。

土錘 (Fig. 17-30)

土師質焼成の管状土錘。径5mmほどの棒に粘土帯を巻き付け成形した後、棒を回しながら引き抜く。外面に巻き付けの接合痕、内面に棒の型が残る。Fトレンチ出土。

須恵器 (Fig. 18-1-16)

1～5は蓋。1は天井の残存部外面約2/3までは回転ヘラケズリ。2は口縁端部を短く内傾させて終わる。3はおそらく撮みをもつであろう。口縁端部は貼り付ける。4は端部をほぼ垂直につまみ出す。5は擬宝珠様撮みをもつもので、天井部内面に渦巻状の粘土紐巻き上げ痕が見える。還元炎焼成不十分。

6～9は坏。6は蓋受けのたちあがりを受け部端とほぼ同じ高さになる。7はたちあがり端部に面をもつ。8は底部回転ヘラ切り未調整。9は内面見込みに沈線状の段を有し、還元炎焼成を行なわない。

10～12は壺底部で内端面が接地する高台をもつ。10は高台が扁平で貼り付け痕明瞭。11

は高台がかなり中央に寄っている。12は高台が小さく接地面は平坦に近い。

13～15は甕。13・14は口縁部で、14は粘土継ぎ目が明らか。15は底部で粗いヘラナデ調整。

16は高坏脚部。歪んでおり底径を復原できないが、10cm強くらいになるかと思われる。

1はEトレンチ第7層出土、4・9・10・12・16はBトレンチ第3層出土、8・11・13はDトレンチ出土、2・5・6・7はFトレンチ出土、3・14・15は不明。

輸入磁器 (Fig. 18-17～21)

17・18は白磁碗。17は口縁部で、端部を外反させ水平にする。内面には1条の沈線を有し、釉がかりはやや厚い。横田・森田分類V-4・a類³⁾。18は底部で、直立する高台をやや粗く削り出し、内面見込みに1条の沈線を有する。釉は薄く、体部外面下半と高台部には施釉しない。

19～21は青磁。19は龍泉窯系の碗口縁部。端部は丸く納め、釉は厚い。内面に片彫りの沈線2条と飛雲文の一部が認められる。I-4・a類。20・21は同安窯系で、20は皿底部。内底に櫛描きジグザグ文とヘラによる片彫り文様を有する。外面体部下半と底部は露胎。21は碗体部で内面に櫛描きジグザグ文とヘラ描き片彫り文様、外面には櫛目。ともにI-1・b類。

18・21はFトレンチ出土、17・19・20は不明。

国産陶器 (Fig. 18-22)

甕の胴部。内外面にタタキの痕跡が残る。外面は後にナデ調整を施す。出土地区不明。国産磁器も青磁、染付などの破片が存在するが凶化し得ない。

石器 (Fig. 19-1～8, PL. 18) 磨石、剝片に加え、黒曜石と滑石の原石が出土した。

磨石 (1)

全面に細かな擦痕が残る。が、擦るだけにとどまらず敲打にも使用されている。Fトレンチ出土。

原石 (2～4)

2は姫島産黒曜石の原石。まったく未加工の転礫で、全面が磨滅・風化して丸くなった自然面である。姫島の地理的条件から考えて、おそらくは海浜での水磨を受けた転礫の採集にかかるものと思われる。

3・4は滑石の原石で、ノミによる加工痕を顕著に残すもの。ノミは刃渡り約2cmほど

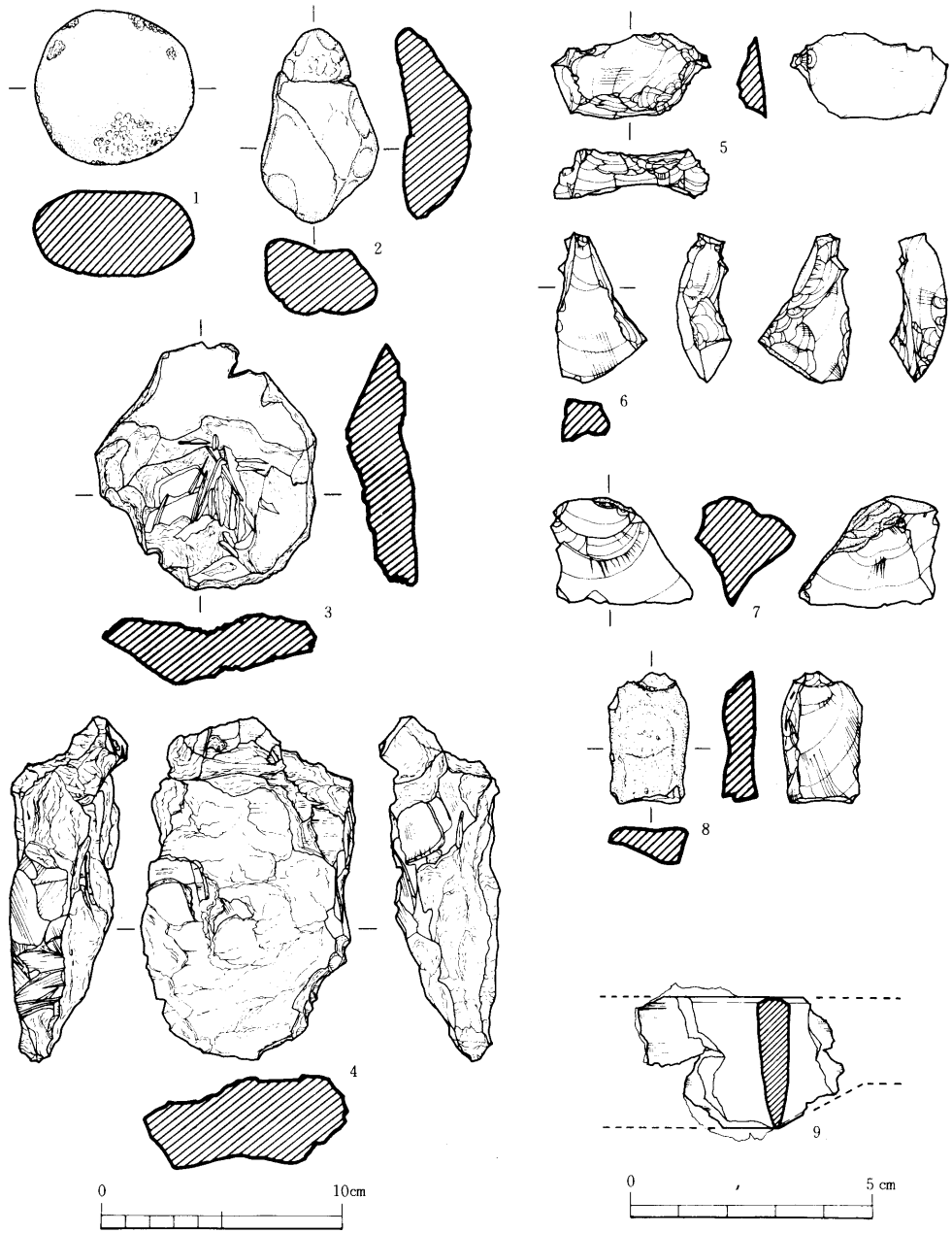


Fig. 21 包含層出土遺物実測図（石器・鉄器）

のものが使われ、3では正面中央、4では左側面にその刃先痕が集中している。

2・4はDトレンチ出土、3はFトレンチ出土。なお、図化しなかったが滑石の剥片も1片ではあるが出土しており、当該地周辺で滑石加工作業が行なわれたことを裏付ける。

剥片（5～8）

4点とも黒曜石。5は細石核の打面再生剥片の可能性はある。先に正面右下側縁より加撃しているが良好な平坦面が得られず、もう一度右側縁より加撃しなおしている。目的剥片の幅は1cm弱と思われる。上縁には自然面が多く残る。6も下縁に平坦な自然面を残す。7・8は姫島産のもので、ともに磨滅して丸くなった自然面を多く残している。

7はBトレンチ出土、8はDトレンチ出土、6はFトレンチ出土、5は不明。

注目すべきは原石類の出土であろう。全く未加工の、水磨を受けた自然面をもつ姫島産黒曜石の原石と、同様の自然面を大きく残す剥片の出土は、かなりの量の原石が海浜で拾われ、そのまま消費地に持ち運ばれたことを示している。滑石の原石についても、ノミの刃先痕が顕著に残り、剥片の出土とあわせ当該地周辺で加工作業が行なわれたことは明らかである。加工器具の形状を知ることのできる資料としても重要である。

鉄器（Fig. 19-9, PL. 18-9）

下縁に刃部を作り出す鍛造品で、左右を欠損しているが鉄刀の関^{まち}附近の可能性が高い。サビぶくれが激しくかつ小片のため、全体的な形状は不明である。Fトレンチ出土。

他に、Cトレンチより形状不明の鉄製品が出土している。わずかにほぼ円形の折損断面が認められる。

その他の出土遺物

鋼滓

同質のものが2点出土している。おそらく鉄滓であろうが、未分析のため鋼滓としておく。ともに軽く、金属成分の含有率はかなり低いと思われる。最大長4.9cm、最大幅2.8cm、最大厚2.0cm、重さ18gのものと、最大長3.3cm、最大幅2.1cm、最大厚1.6cm、重さ9gのものである。出土地区不明。なお、Fトレンチからも小片が出土している。

磁器焼成窯壁体の一部（PL. 18-10）

高台が剥がれたと思われる円形の痕跡を有し、その高台の一部が欠損して、剥がれずに溶着している。わずかに残った高台はおそらく青磁碗のもので、緑灰色の釉がみえる。高台径は5cm弱くらいになるであろう。壁体は強い熱を受けており、ガラス状の光沢をもつ。Bトレンチ出土。

遺構出土の遺物については、穀物・食物種子類の検出はなかったが、貯蔵用堅穴と推定される第3号土壙出土の土器が注目されよう。弥生時代前期末・中期初頭のものが一括投棄された状態で出土しており、両時期の土器様相を知る好資料である。

包含層からは、周辺地域からの流入品とみられる縄文時代後期から室町・江戸時代までのさまざまな遺物⁴⁾が出土しており、主体となる時期を判定しがたいが、前庭上段部分⁵⁾や第2学生食堂敷地内で弥生時代後期後半、古墳時代前期の住居跡が検出されていることから、生活の場はやや高位に位置することが想定され、今回出土の遺物もこれらに起因するものが少なくないと考えられる。

遺物で特に注目すべきは、加工痕のある滑石と姫島産黒曜石の原石であり、石材の原産地と加工地、加工方法などを追求する上で、重要な基礎資料となる。

(河村・杉原)

Tab. 2 遺構出土土器観察表

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
A トレンチ第1号土壙 (Fig. 11)							
1	弥生土器 甕	19.2	(27.2)	にぶい褐色(7.5Y R5/4)	0.3cm程度の砂粒多含む	やや軟	口縁~胴部外面煤附着
2	弥生土器 甕	—	(17.0)	にぶい橙色(7.5Y R7/3)	0.3cm程度の砂粒若干	良好	胴部外面煤附着
B トレンチ第1号堅穴住居跡 (Fig. 12)							
1	弥生土器 壺	—	(14.0)	浅黄褐色(7.5Y R8/3)	0.3cm程度の砂粒含む	やや軟	外面風化著しい
2	弥生土器 壺	—	(4.4)	灰白色(2.5Y 8/2)	砂粒を若干含む	やや軟	外面風化著しい
3	弥生土器 壺	11.5	(3.9)	にぶい橙色(7.5Y R7/3)	砂粒を若干含む	良好	
4	弥生土器 壺	11.0	20.5	灰白色(7.5Y R8/2)	砂粒を若干含む	やや軟	
5	弥生土器 壺	—	(2.6)	灰白色(7.5Y R8/2)	0.1~0.2cmの砂粒含む	良好	
6	弥生土器 甕	19.7	(5.2)	浅黄褐色(7.5Y R8/3)	砂粒を若干含む	良好	口縁部外面指圧痕有り
7	弥生土器 甕	23.9	(2.6)	灰白色(7.5Y R8/2)	精良	良好	
8	弥生土器 甕	25.5	(5.5)	にぶい褐色(7.5Y R8/3)	0.3cm程度の砂粒多く含む	やや軟	外面風化著しい
9	弥生土器 甕	15.5	(6.6)	明褐灰色(7.5Y R7/2)	0.4cm程度の砂粒含む	良好	口縁外面煤附着
10	弥生土器 甕	* 5.9	(3.7)	外-にぶい橙色(7.5Y R7/3) 内-にぶい橙色(5Y R7/4)	0.4cm程度の砂粒多く含む	良好	
11	弥生土器 甕	—	(2.4)	外-灰褐色(5Y R7/2) 内-にぶい橙色(7.5Y R7/3)	砂粒を若干含む	良好	頸部外面ハケ原体による刺突文
12	弥生土器 高坏	24.0	(4.7)	浅黄褐色(7.5Y R8/3)	0.4cm程度の砂粒含む	良好	
13	弥生土器 高坏	25.5	(3.6)	灰白色(2.5Y 8/2)	0.3cm程度の砂粒含む	良好	
14	弥生土器 小壺	* 2.2	(6.9)	灰白色(10Y R8/2)	0.2~0.5cmの砂粒含む	良好	
C トレンチ第3号土壙 (Fig. 14)							
1	弥生土器 壺	—	(3.7)	にぶい橙色(5Y R6/4)	砂粒を若干含む	良好	

遺 物

No.	器 種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色 調	胎 土	焼成	備 考
2	弥生土器 壺	—	(1.8)	橙色(7.5Y R 6/6)	0.1~0.2cmの砂粒含む	良好	口唇部ハケ原体沈線有り
3	弥生土器 壺	—	(4.7)	明赤褐色(2.5Y R 5/8)	砂粒を多量に含む	良好	
4	弥生土器 壺	—	(2.3)	外-にぶい赤褐色(5 Y R 5/3) 内- 橙色(5 Y R 6/6)	0.1~0.3cmの砂粒含む	良好	肩部貝殻施文有り
5	弥生土器 壺	—	(4.1)	にぶい橙色(7.5 Y R 7/3)	砂粒を若干含む	良好	肩部無軸羽状文有り
6	弥生土器 壺	—	(5.2)	橙色(5 Y R 6/6)	砂粒を若干含む	良好	胴部有軸羽状文・沈線有り
7	弥生土器 壺	—	(3.9)	外-にぶい赤褐色(5 Y R 5/4) 内-にぶい橙色(7.5 Y R 7/3)	0.1~0.5cmの砂粒含む	良好	肩部刺突文有り
8	弥生土器 甕	—	(7.2)	にぶい褐色(7.5 Y R 6/3)	砂粒を若干含む	良好	口唇部ハケ原体沈線有り
9	弥生土器 甕	18.3	(6.9)	橙色(5 Y R 7/6)	砂粒を若干含む	良好	胴部外面煤付着
10	弥生土器 甕	* 9.0	(5.5)	橙色(2.5 Y R 6/8)	砂粒を多量に含む	やや軟	内・外面風化著しい
11	弥生土器 壺	*10.2	(7.6)	にぶい褐色(7.5 Y R 6/3)	砂粒を多量に含む	やや軟	
12	弥生土器 壺	*13.1	(6.0)	にぶい橙色(7.5 Y R 6/4)	0.3cm程度の砂粒含む	やや軟	
13	弥生土器 甕	* 6.2	(5.6)	にぶい赤褐色(5 Y R 5/4)	砂粒を若干含む	良好	二次加熱を受けたものか
14	弥生土器 甕	* 6.1	(10.4)	にぶい橙色(7.5 Y R 6/4)	砂粒を若干含む	良好	
Dトレンチ第4号土壌 (Fig. 16)							
	土師質土器 甕	68.8	(8.0)	浅黄橙色(7.5 Y R 8/6)	砂粒を若干含む	良好	口縁端部よりややや下位に一条の沈線
Dトレンチ第5号土壌 (Fig. 17)							
1	土師質土器 甕	*17.4	(24.0)	にぶい黄橙色(10 Y R 7/3)	精良	良好	埋甕
2	須恵器 埴	—	(1.6)	灰色(5 Y 8/1)	精良	良好	
3	土師器 皿	7.6	1.1	にぶい黄橙色(10 Y R 6/4)	精良	良好	灯明皿か、底部内面に煤付着
4	土師器 皿か坏	* 5.1	(1.1)	灰白色(2.5 Y 8/2)	精良	良好	
5	土師器 焙烙	—	2.8	にぶい橙色(7.5 Y R 7/4)	精良	良好	口縁内側、底部内面に煤付着
6	瓦質土器 焙烙	21.6	3.2	灰褐色(7.5 Y R 6/2)	精良	良好	口縁内側、底部外面煤付着
7	陶器 甕	—	(3.5)	素地- 褐灰色(10 Y R 5/1) 釉- 透明	精良	良好	
8	磁器 埴	* 3.1	(3.4)	素地- 灰白色(10 Y R 8/1) 釉- 透明, 染付- 青灰色(5 B 5/1)	精良	良好	染付
Fトレンチ柱穴 (Fig. 18)							
1	弥生土器	* 3.2	(6.3)	外- 浅黄橙色(7.5 Y R 8/3) 内- 褐灰色(7.5 Y R 6/1)	砂粒を若干含む	良好	
2	土師器 甕	17.0	(4.5)	にぶい褐色(7.5 Y R 6/3)	砂粒を若干含む	やや軟	風化著しい
3	土師器 皿	8.3	1.5	淡赤橙色(2.5 Y R 7/4)	砂粒を若干含む	良好	

Tab. 3 包含層出土土器観察表

No.	器 種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色 調	胎 土	焼成	備 考
包含層 (Fig. 19)							
1	縄文土器	—	(3.2)	外- 明赤褐色(5 Y R 5/6) 内- 黒褐色(10 Y R 3/1)	砂粒を若干含む	良好	
2	縄文土器	—	(3.4)	外- にぶい褐色(7.5 Y R 6/3) 内- 褐灰色(7.5 Y R 5/1)	砂粒を若干含む	良好	
3	縄文土器	—	(4.0)	外- 褐色(7.5 Y R 4/3) 内- 黒褐色(7.5 Y R 3/1)	0.1~0.3cmの砂粒を含む	良好	
4	縄文土器	—	(3.8)	褐色(7.5 Y R 4/3)	0.1cm程度の砂粒含む	良好	
5	縄文土器 深鉢	40.4	(8.3)	外- にぶい橙色(7.5 Y R 7/3) 内- 黒褐色(7.5 Y R 3/1)	砂粒多く、金雲母を含む	良好	粗製、口縁外面煤付着、胴部に穿孔?

吉田構内学生会館環境整備に伴う試掘調査

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
6	弥生土器 甕	—	(2.6)	浅黄橙色(10Y R8/3)	砂粒を若干含む	良好	口唇部外面2条の凹線
7	弥生土器 甕	—	(2.0)	灰白色(10Y R8/2)	0.3cm程度の砂粒含む	良好	口唇部外面丹塗、口唇部2条の凹線
8	弥生土器 壺	—	(2.2)	にぶい橙色(5 Y R6/3)	0.2cm程度の砂粒含む	良好	無軸羽状文有り
9	弥生土器 壺	—	(3.3)	灰白色(10Y R8/2)	0.3cm程度の砂粒含む	良好	肩部刺突文有り
10	弥生土器 高坏	—	(3.1)	外-浅黄橙色(10Y R8/3) 内-黒褐色(10Y R3/1)	0.1~0.3cm程度の砂粒含む	良好	
11	弥生土器 高坏	—	(3.9)	黄灰色(2.5 Y6/1)	0.1cm程度の砂粒含む	良好	内外面丹塗り
12	弥生土器 高坏	—	(9.3)	にぶい橙色(5 Y R7/4)	砂粒を多量に含む	良好	
13	弥生土器 高坏	—	(3.5)	灰白色(2.5 Y8/1)	精良	良好	土師器か
14	弥生土器 高坏	—	(3.9)	灰白色(10Y R8/2)	砂粒を若干含む	良好	土師器か
15	弥生土器 甕	* 6.6	(6.5)	にぶい橙色(5 Y R7/3)	砂粒多く、黒雲母含む	良好	
16	弥生土器 甕	* 8.4	(5.2)	にぶい橙色(5 Y R7/4)	砂粒若干、黒雲母含む	良好	
17	弥生土器 壺	* 8.6	(3.4)	明褐色(7.5 Y R7/2)	砂粒を多量に含む	良好	
18	弥生土器 壺	*10.1	(6.0)	橙色(5 Y R6/6)	砂粒を多量に含む	良好	胴部内面煤?付着
19	土師器 壺	12.2	(5.7)	にぶい橙色(5 Y R6/3)	0.1cm程度の砂粒含む	良好	
20	土師器 碗	13.7	(6.5)	淡橙色(5 Y R8/3)	精良	良好	
21	土師器 碗	* 6.1	(1.5)	外-明褐色(7.5 Y R7/2) 内-灰褐色(7.5 Y R6/2)	精良	良好	黒色土器か
22	土師器 碗	* 6.2	(3.2)	灰白色(10Y R8/2)	砂粒若干含む	良好	
23	土師器 皿	—	(1.4)	灰白色(10Y R8/1)	精良	良好	畿内系[ての字形口縁]
24	瓦質土器	—	(1.9)	にぶい黄橙色(10Y R7/3)	砂粒を若干含む	良好	
25	瓦質土器	—	(1.5)	灰白色(2.5 Y8/2)	精良	良好	
26	瓦質土器	—	(3.3)	にぶい褐色(7.5 Y R6/3)	砂粒を若干含む	良好	
27	瓦質土器	—	(4.7)	褐色(10Y R5/1)	砂粒を若干含む	良好	
28	瓦質土器	—	(5.0)	にぶい黄橙色(10Y R7/2)	砂粒を若干含む	良好	鼎脚部
29	手捏土器 高坏	* 2.5	(2.0)	浅黄橙色(7.5 Y R8/3)	精良	良好	
30	土錘	0.9	5.2	灰白色(10Y R8/1)	精良	良好	
包含層 (Fig. 20)							
1	須恵器 蓋	—	(2.4)	灰色(7.5 Y5/1)	砂粒を若干含む	良好	
2	須恵器 蓋	13.5	3.3	褐色(10Y R6/1)	砂粒を若干含む	良好	
3	須恵器 蓋	12.5	(2.5)	灰白色(N7/0)	砂粒を若干含む	良好	
4	須恵器 蓋	13.5	2.4	灰色(N6/0)	精良	良好	
5	須恵器 蓋	—	(1.6)	灰白色(10Y R8/1)	精良	良好	天井部内面粘土紐巻き上げ痕
6	須恵器 坏	9.0	(2.6)	灰白色(10Y R7/1)	精良	良好	
7	須恵器 坏	8.8	(3.1)	灰色(5 Y5/1)	精良	良好	
8	須恵器 坏	12.3	3.6	灰白色(2.5 Y8/2)	砂粒を若干含む	良好	
9	須恵器 坏	*10.0	(3.2)	灰色(5 Y6/1)	砂粒を若干含む	良好	
10	須恵器 碗	* 4.7	(1.3)	灰白色(7.5 Y7/1)	砂粒を若干含む	良好	
11	須恵器 碗	* 8.4	(1.6)	灰白色(N7/0)	精良	良好	
12	須恵器 碗	* 7.4	(1.8)	灰色(N6/0)	砂粒を若干含む	良好	

遺 物

No.	器 種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色 調	胎 土	焼成	備 考
13	須恵器 甕	—	(3.0)	外 - 灰色(N5/0) 内 - 灰色(N6/0)	精良	良好	胎土中に約0.5cm の礫少量含む
14	須恵器 甕	—	(4.2)	灰色(N6/0)	精良	良好	
15	須恵器 甕	*11.6	(1.3)	外 - 灰色(N6/0) 内 - 灰白色(N7/0)	精良	良好	
16	須恵器 高坏	—	(2.4)	灰白色(N7/1)	精良	良好	
17	白磁 碗	—	(2.4)	素地 - 灰白色(7.5Y8/1) 釉 - 透明	精良	良好	V-4・a 類
18	白磁 碗	* 6.3	(3.3)	素地 - 灰白色(7.5Y8/1) 釉 - 透明	精良	良好	見込みと沈線
19	青磁 碗	—	(1.9)	素地 - 灰白色(5Y8/1) 釉 - 緑灰色	精良	良好	I-4・a 類
20	青磁 皿	* 5.0	(1.3)	素地 - 灰白色(5Y8/1) 釉 - 青灰色	精良	良好	I-1・b 類
21	青磁 碗	—	(2.2)	素地 - 灰白色(5Y8/1) 釉 - 緑灰色	精良	良好	I-1・b 類
22	陶器 甕	—	(3.1)	暗赤灰色(2.5YR3/1)	精良	良好	タタキ

Tab. 4 出土石器観察表

()は現存値

No.	器 種	長 さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	備 考
Bトレンチ第1号竪穴住居跡 (Fig. 13)							
1	剥片	(3.8)	2.1	1.3	(11)	石英(水晶)	二次加工痕あり
Cトレンチ第3号土壙 (Fig. 15)							
1	扁平打製石斧	(9.5)	5.0	1.2	(84)	結晶片岩	掘跡 女性器シンボルか
2	用途不明石器	10.3	8.7	5.0	405	凝灰岩	
3	石核	14.5	10.7	9.5	1951	珪質凝灰岩	
4	剥片	8.3	5.3	2.4	118	珪質凝灰岩	
5	剥片	3.9	7.4	2.1	65	珪質凝灰岩	
6	剥片	2.6	1.8	0.5	1	黒曜石	
7	剥片	1.7	1.1	0.4	0.5	黒曜石	
8	剥片	1.8	1.3	0.5	1	黒曜石	
9	剥片	2.8	1.7	1.5	6	黒曜石	
10	剥片	(1.5)	1.6	(0.6)	(1)	黒曜石	
11	剥片	1.8	1.2	0.7	1	石英(水晶)	
12	剥片	2.1	2.1	0.3	1	讃岐岩質安山岩	
包含層 (Fig. 21)							
1	磨石	6.4	6.7	3.5	222	結晶質凝灰岩	加工面なし ノミ痕顕著 ノミ痕顕著
2	原石	8.0	4.8	3.0	115	姫島産黒曜石	
3	原石	14.2	8.4	3.5	580	滑石	
4	原石	10.2	9.1	2.5	266	滑石	
5	剥片	3.2	1.7	0.6	4	黒曜石	
6	剥片	3.1	1.8	0.8	5	黒曜石	
7	剥片	2.3	2.8	2.0	10	姫島産黒曜石	
8	剥片	2.7	1.6	0.7	5	姫島産黒曜石	

4 小 結

(1) 検出遺構について

検出した主な遺構には、堅穴住居跡、貯蔵用堅穴、土壙、溝、柱穴などがある。時期は弥生時代から近世まで各時期にわたる。

まず、Bトレンチでは弥生時代終末の時期と推定する堅穴住居跡の一部を確認した。この前庭部分周辺地域での既往調査でも堅穴住居跡の検出は多く、第2学生食堂敷地内や前庭上段部分⁷⁾で既に弥生時代から古墳時代にかけてのもの10棟近くが確認されており、当時この地一帯で大きな集落が形成されていたことを裏づける。

Cトレンチ北端では弥生時代前期末から中期初頭と推定する貯蔵用堅穴を検出した。吉田遺跡において、弥生時代の貯蔵施設の存在が明確になったのは、今回の特筆すべき成果である。また、当地区周辺に弥生時代前期から中期にかけての集落跡が存在することが推



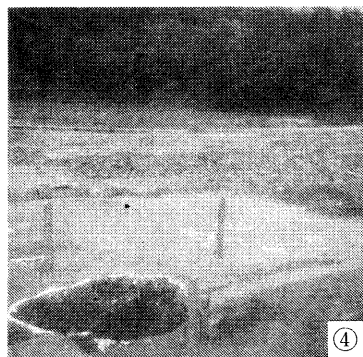
〈現第2食堂敷地の調査(昭和46年11月)〉 全景



溝状遺構(後方の建物は吉田寮)



大形土壙



〈M-13区の調査(昭和46年6月)〉

Fig. 22 昭和46年時における周辺地域の調査(昭和46年4月、11月 森田撮影)

察されるとともに、平川地域における貯蔵用堅穴の初例として貴重な資料である。さらに今回の調査結果から、吉田遺跡調査団が昭和46年4月・11月⁸⁾⁹⁾に本調査対象地の周辺で発掘調査を実施し、大形の円形の土壙を数基検出しているが (Fig. 22-③④参照)、それらの中にも当土壙同様に貯蔵用の機能をもったものが含まれていた可能性も考えられる。なおAトレンチでもCトレンチのものよりさらに一回り大きい弥生時代中期末から後期の時期かと推定する円形土壙が検出されているが、貯蔵用堅穴かどうかについては未完掘のため今後の調査を待って結論づけたい。

(2) 出土遺物について

出土遺物は、縄文時代から近世までの土器・石製品など多種におよぶ。その中で特筆すべきものとしてはまず縄文土器がある。これまで吉田遺跡の中では教育学部周辺で出土している事例があるが、この小地区周辺では初例である。弥生時代前期の遺物が出土していることをも勘案すると、吉田遺跡の中でも比較的早い段階から居住域として利用されていた場所と推察されるとともに、また後世の遺物の出土状況から、この地が長期にわたって利用されていたことが看取される。

また石器研究に関して、滑石と黒曜石の原石および一部加工品の出土が注目される。まず滑石は、加工痕のある原石が数個出土したが、昭和54年に本調査地近辺の本部第二号棟敷地内において、その新営に伴う発掘調査により多数の滑石製模造品の製品が出土している (Fig. 23参照) ことを含め勘案すると、吉田遺跡ではすべての滑石製模造品が製品として搬入されたのではなく、未製品の段階で集落内に持ち込み、その製作を行なったことを推定させる資料である。また黒曜石は、加工面が全くない自然石の出土があり、原産地から集落への搬出時における原材の大きさ、加工度合を考える上で貴重なものである。

なお、12月に樹木移植に伴う立会調査を実施した際、

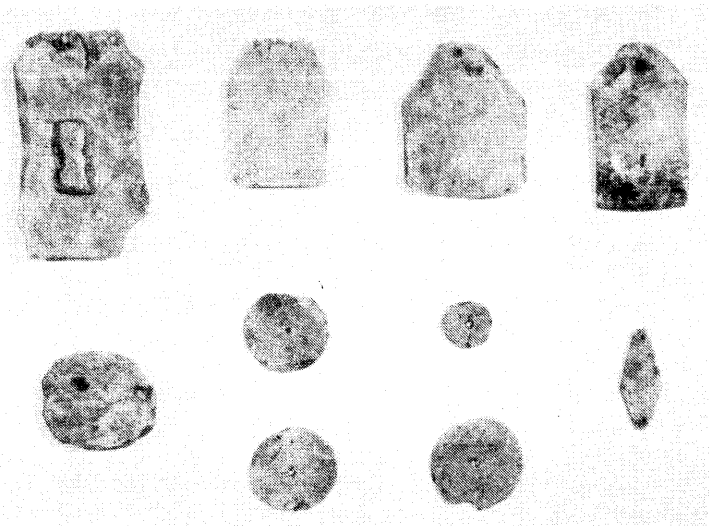


Fig. 23 L-14区出土の滑石製模造品

不明土壌内の上位包含層から墨書土器が出土した（本書P65参照）。墨書土器は周防においては希有な遺物で、本例は奈良時代末から平安時代初め頃のもの¹⁰⁾と推定する。吉田遺跡の古代・中世に関して、官衙や荘所あるいはそれに準じる機能をもつ集落の存在が考えられるとする説があるが、この推論を傍証する一資料として注目され、さらに今後の調査に期待するところである。

(3) 埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

調査対象地域は、北側に広がる前庭上段部分との間に大きな段差があることから、既に古い時代の遺構は削平され、消失している蓋然性が高いとの推測も一部にあったが、今回の試掘調査の結果、Eトレンチ内北東端からFトレンチ方向の東域にかけて遺構が消失している部分も確認したものの、南西域においては広範囲に遺構が遺存していることがわかった。遺構の遺存状況は、大学移転時等の工事に際して、かなり削平を受けているために、あまり良好とは言えない。しかし、竪穴住居跡や貯蔵穴など集落の存在を示す顕著な遺構が確認されたことは、第2学生食堂敷地内や前庭上段部分の既往調査結果を合わせ勘案すると、この丘陵が吉田遺跡として周知されている範囲の中でも、教育学部西側に広がる保存地区周辺と並んで、重要な位置を占める地域であることは明らかである。

今後、この地をどのように環境整備するかは、環境整備委員会や大学事務局等で進められるが、最後に、Fig. 25で現地表面から遺物包含層上面（包含層が既に消失している部分は遺構面）までの深度を示した。環境整備の計画を立てるにあたっては、このデータをもとにできる限り、遺構・包含層に影響がないよう十分な配慮がなされることを望む。なお、止むを得ず提示した深度以上の土地掘削を必要とするときは、改めて埋蔵文化財の調査が必要である。 (森 田)

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「大学会館新営予定地M-14・15区の試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。
- 2) 防府市教育委員会「周防国府跡・周防国分寺昭和56年度発掘調査概報」（『防府市文化財調査年報Ⅵ』、1984年）。
- 3) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」（『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館、1978年）。
- 4) 1) に同じ。
- 5) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内第Ⅰ地区E区発掘調査概報』（孔版、1971年）。
- 6) 5) に同じ。
- 7) 1) に同じ。
- 8) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』（孔版、1971年）。
- 9) 5) に同じ。
- 10) 森田孝一「周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相—吉田遺跡をめぐる諸問題—」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年）。

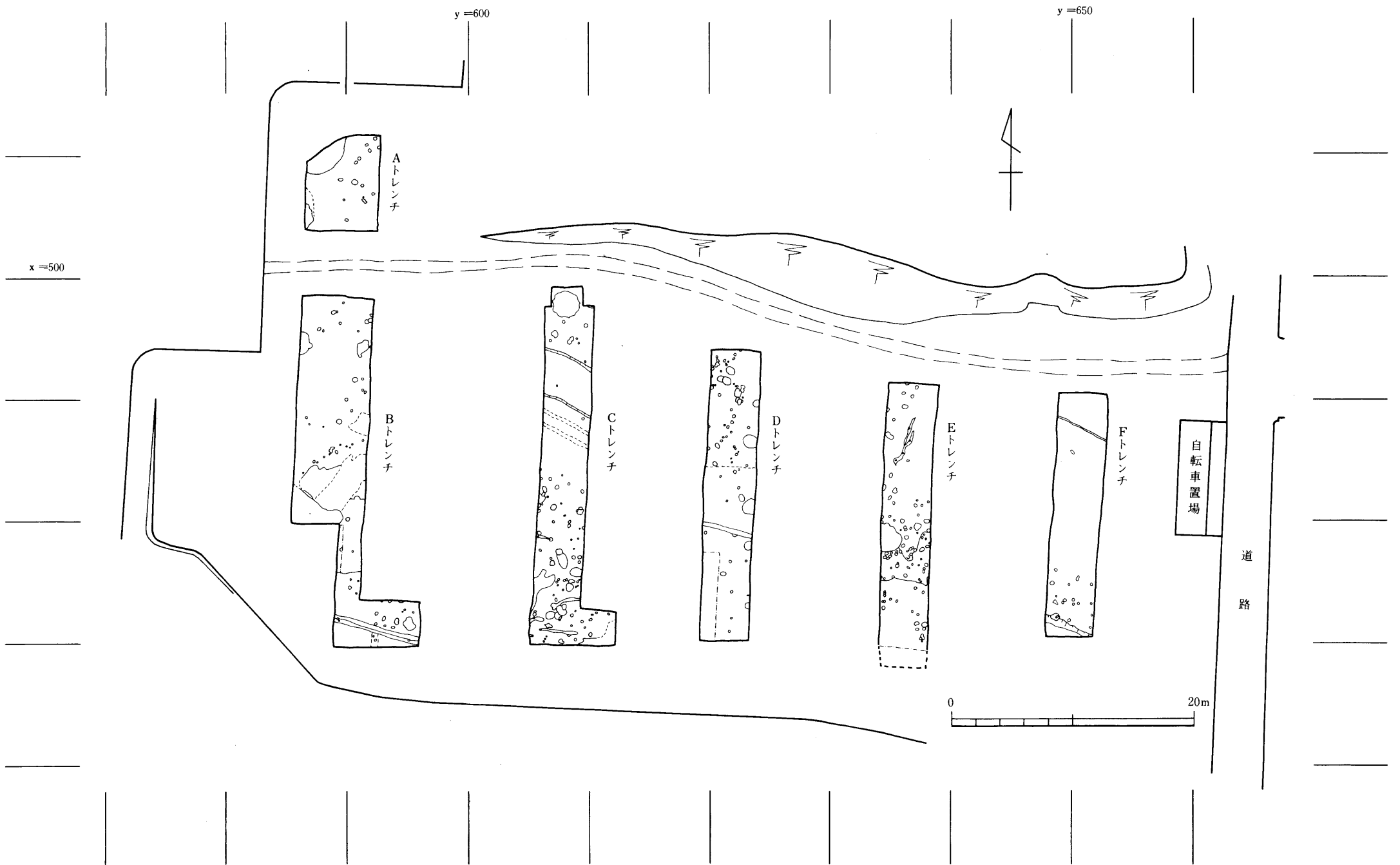


Fig. 24 遺構分布図

- 0 ~ 10cm
- 11 ~ 20cm
- 21 ~ 30cm
- 31 ~ 40cm
- 41 ~ 50cm
- 51 ~ 60cm
- 61 ~ 70cm
- 71 ~ 80cm
- 81 ~ 140cm



Fig. 25 遺物包含層上面ないしは遺構面までの深さ



(1) 調査地域全景(西から)



(2) Aトレンチ全景(南から)



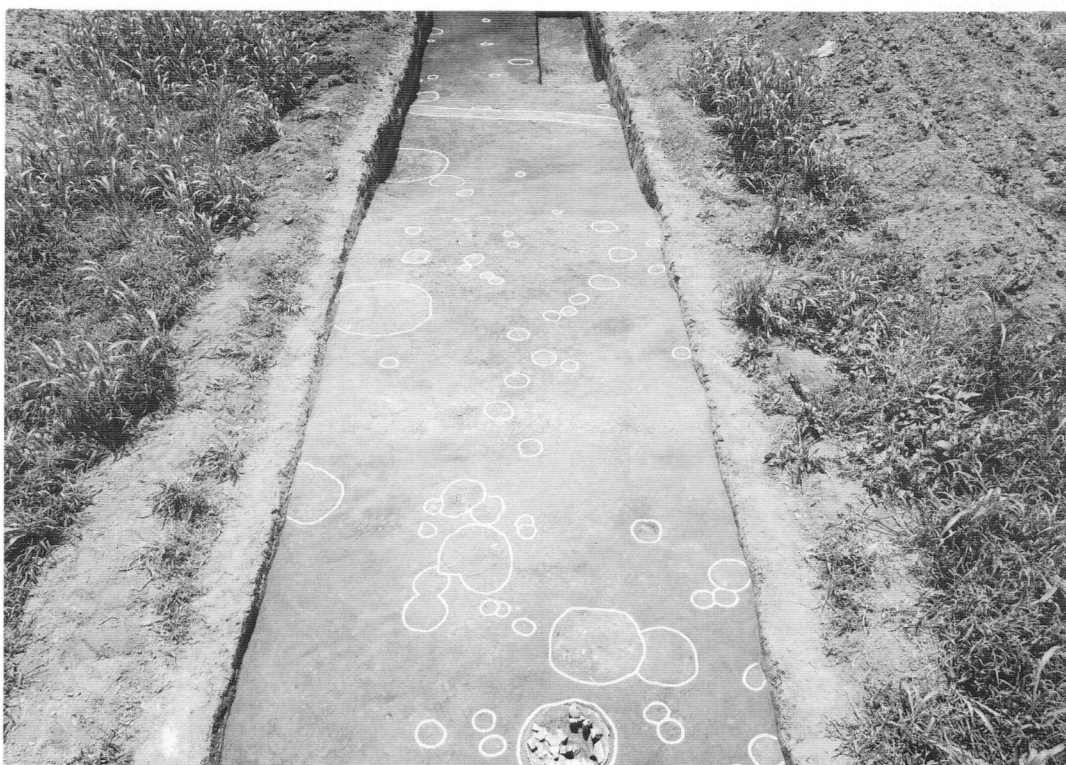
(1) Bトレンチ全景(北から)



(2) Cトレンチ北半部全景(北から)



(1) Cトレンチ南半部全景(北から)



(2) Dトレンチ全景(北から)



(1) Eトレンチ全景(北から)



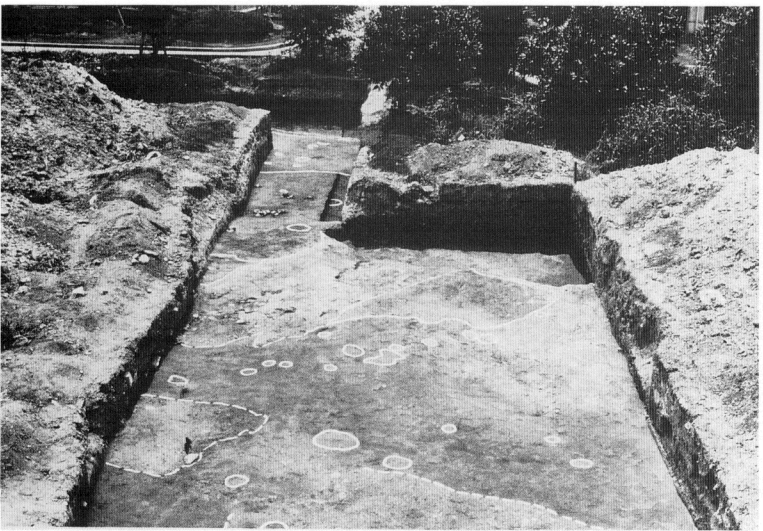
(2) Fトレンチ全景(北から)



(1) Aトレンチ第1号土壙(南から)



(2) Aトレンチ第1号土壙遺物出土状況
(南東から)



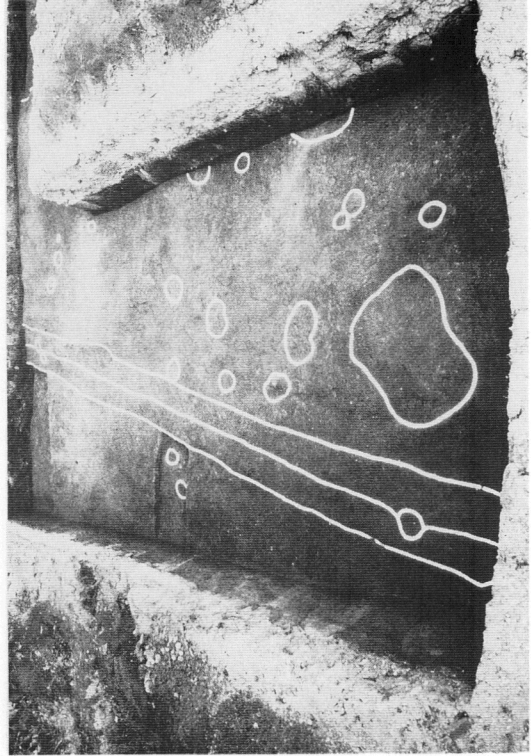
(3) Bトレンチ南半部遺構分布状況
(北から)



(4) Bトレンチ第1号竪穴住居跡
(西から)



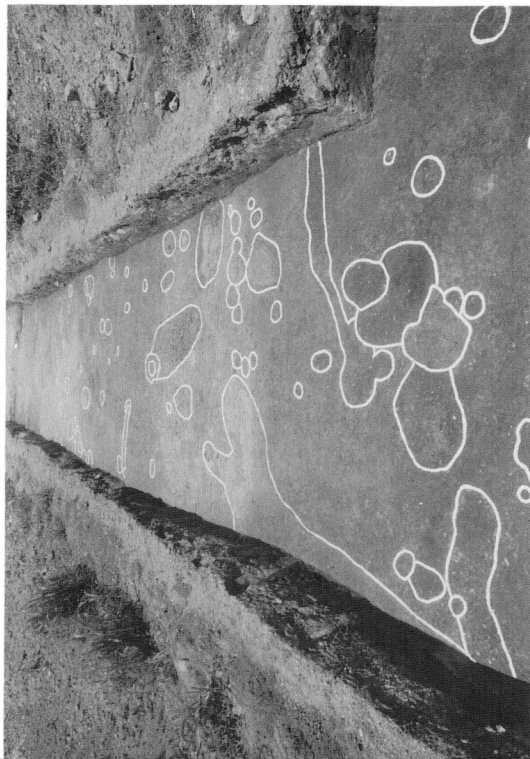
(1) Bトレンチ第1号竪穴住居跡遺物出土状況
(南から)



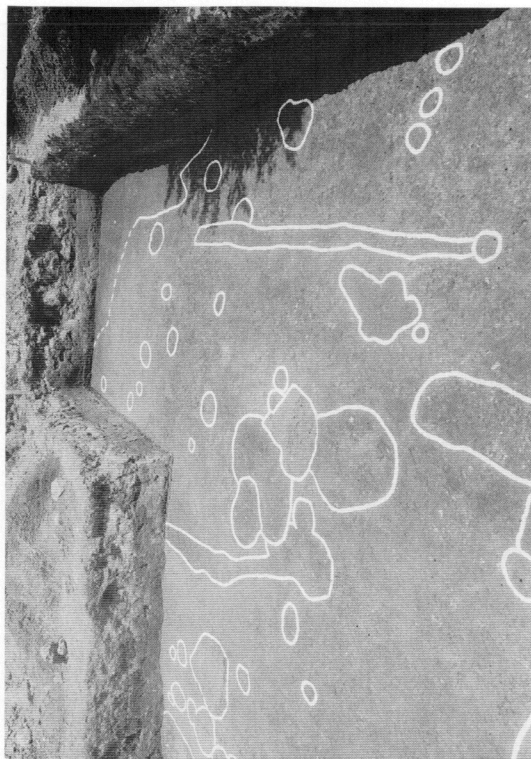
(2) Bトレンチ拡張部遺構分布状況(東から)



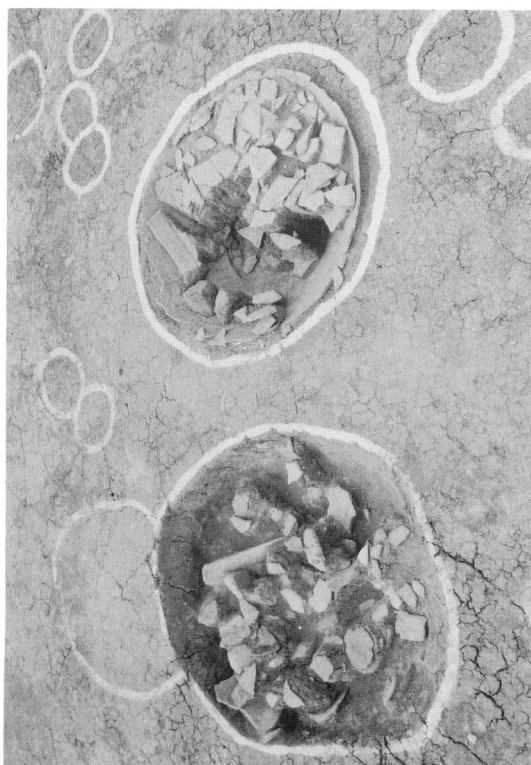
(3) Cトレンチ第3号土層(南から)



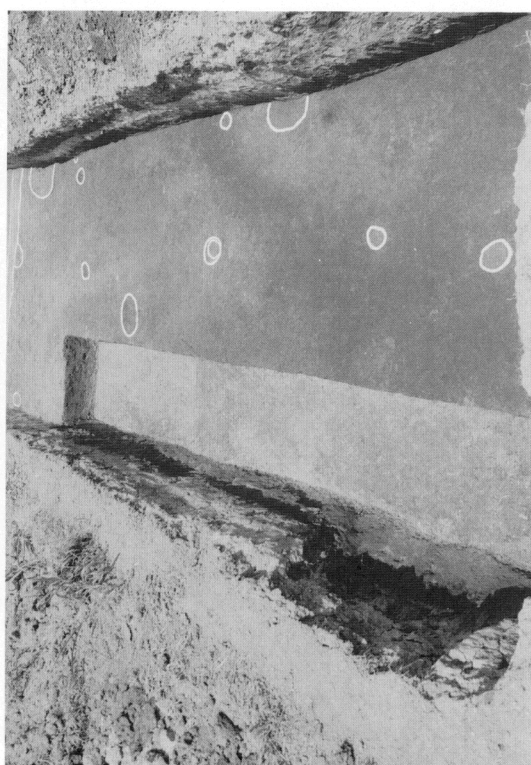
(1) Cトレンチ南端部遺構分布状況(南から)



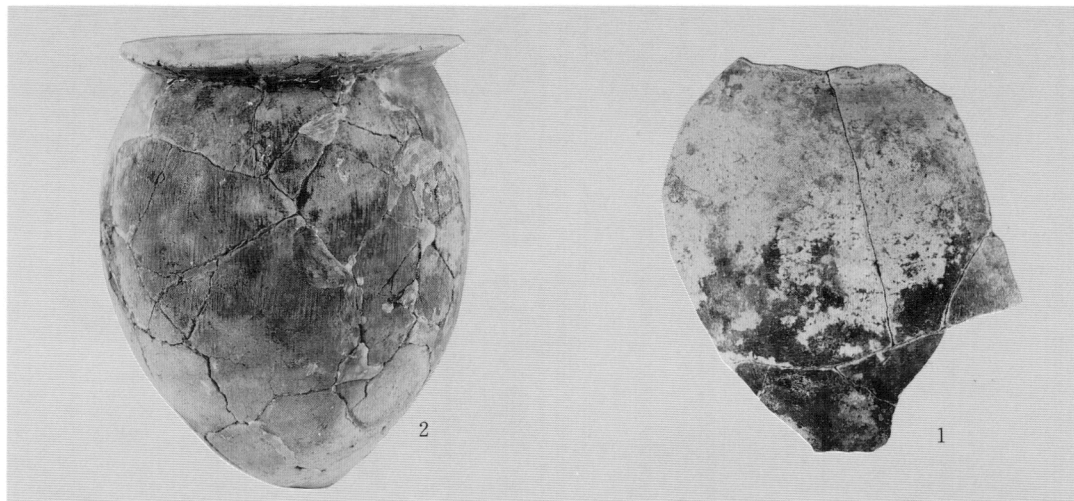
(2) Cトレンチ拡張部遺構分布状況(西から)



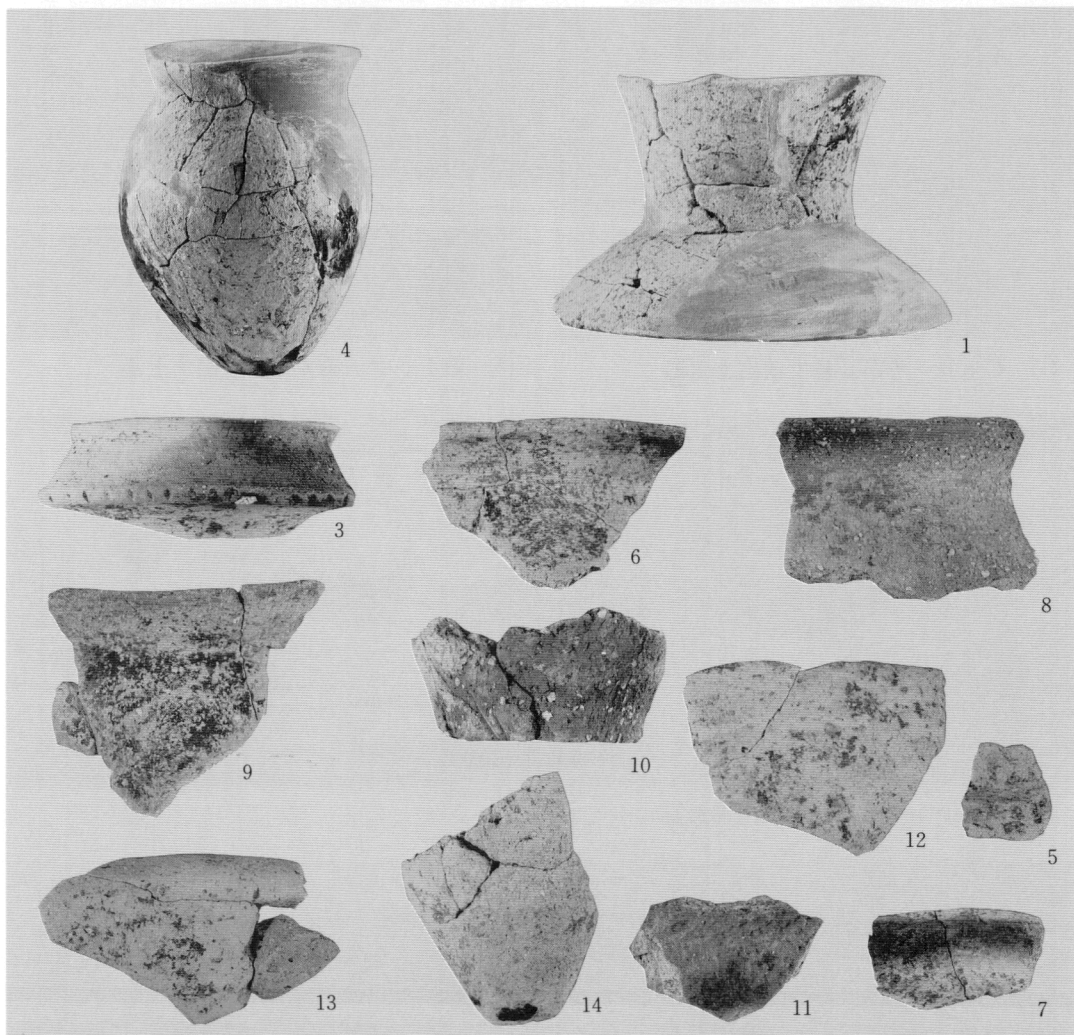
(3) Dトレンチ第4・5号土坑(東から)



(4) Dトレンチ南半部地山落ち込み状況(北から)



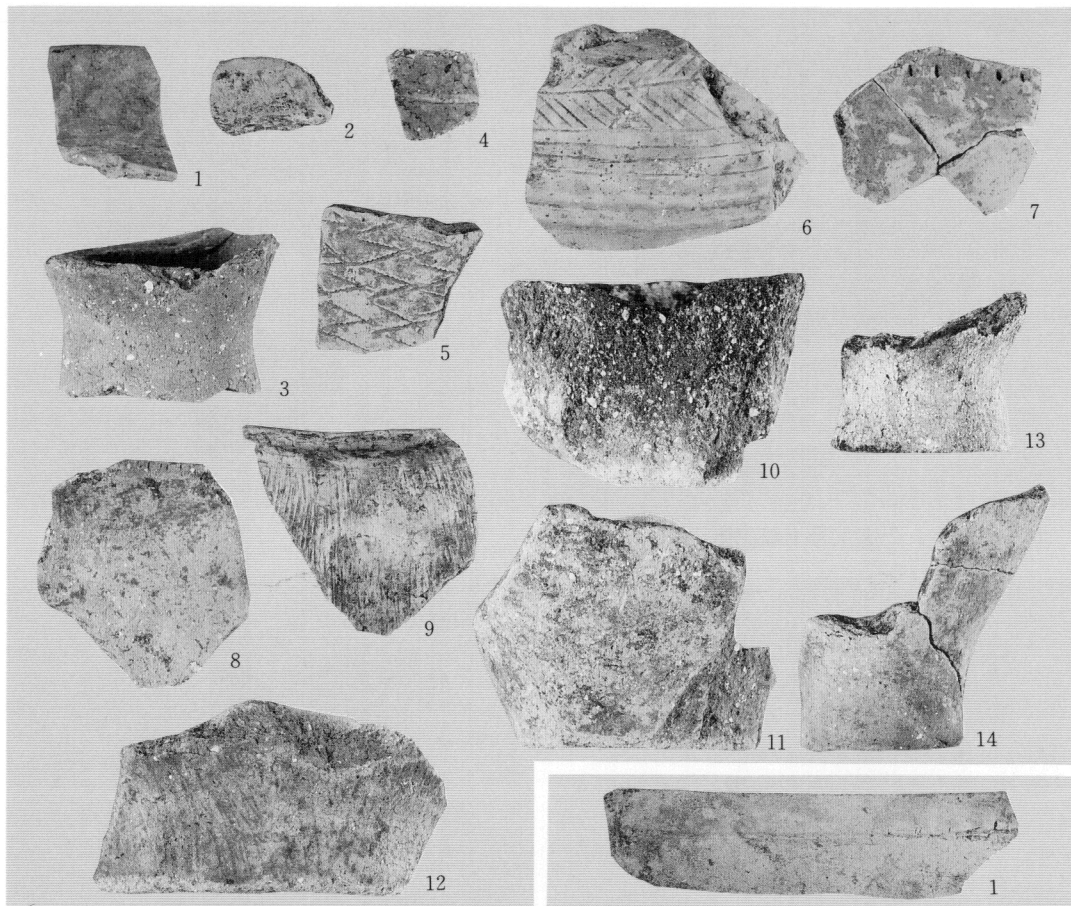
(1) Aトレンチ第1号土坑出土土器



(2) Bトレンチ第1号竪穴住居跡出土土器

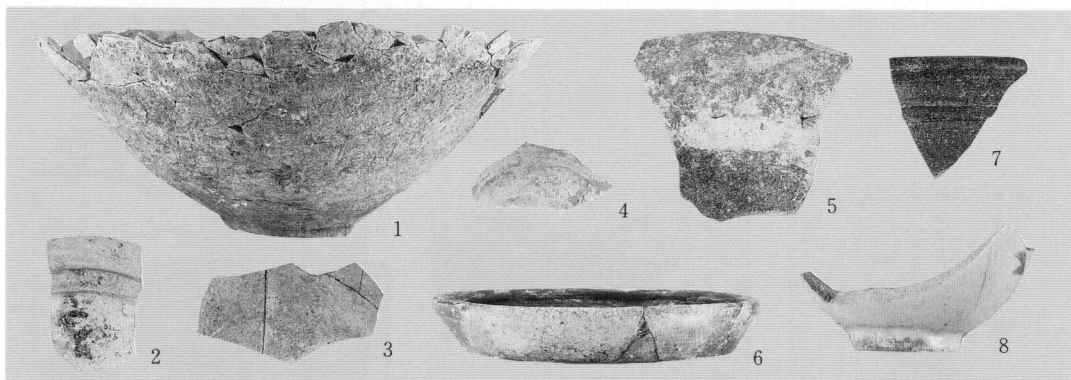
PL. 14

吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査(9)

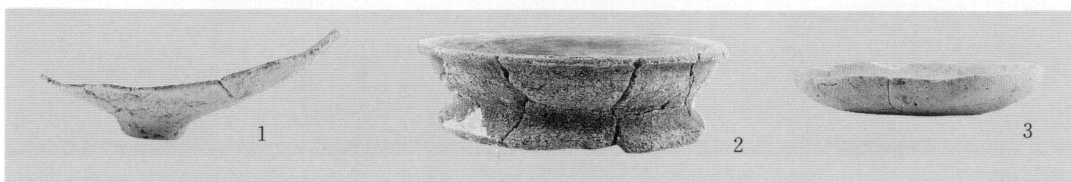


(1) Cトレンチ第3号土壙出土土器

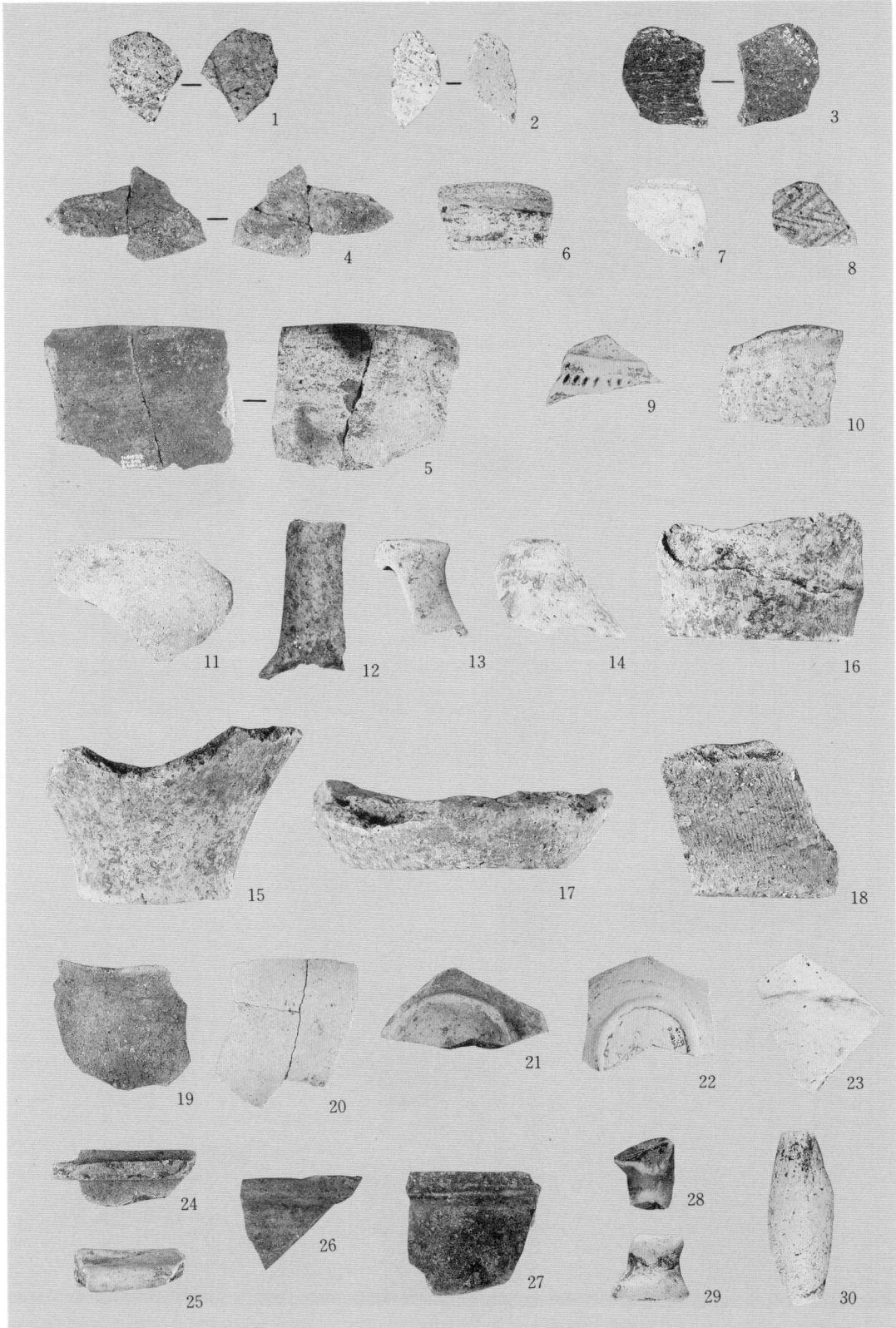
(2) Dトレンチ第4号土壙出土土器



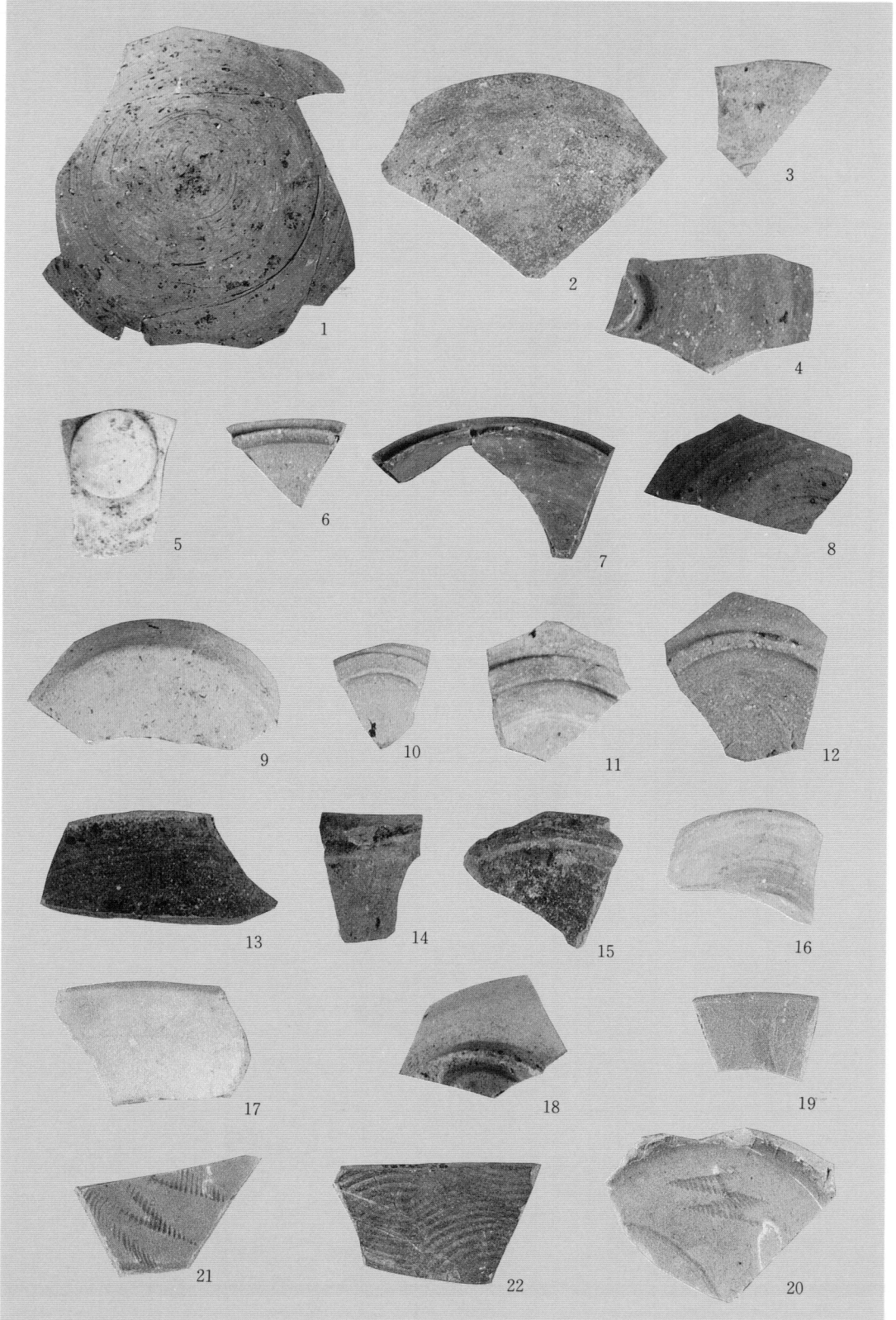
(3) Dトレンチ第5号土壙出土土器



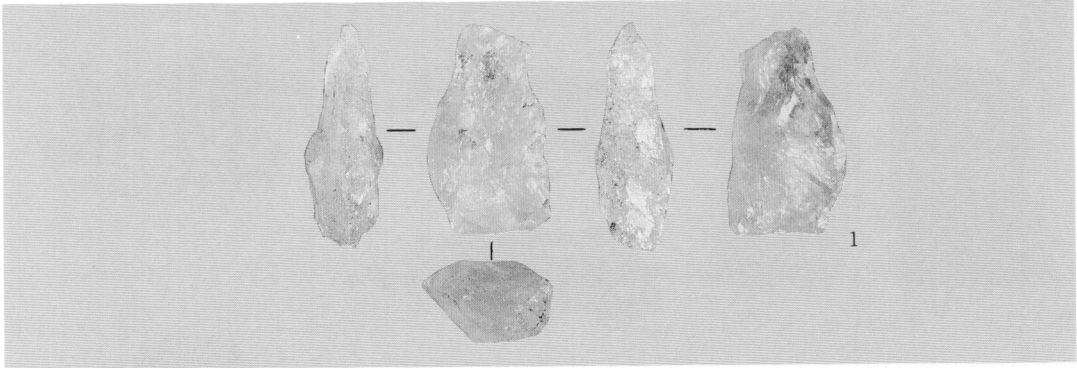
(4) Fトレンチ柱穴出土土器



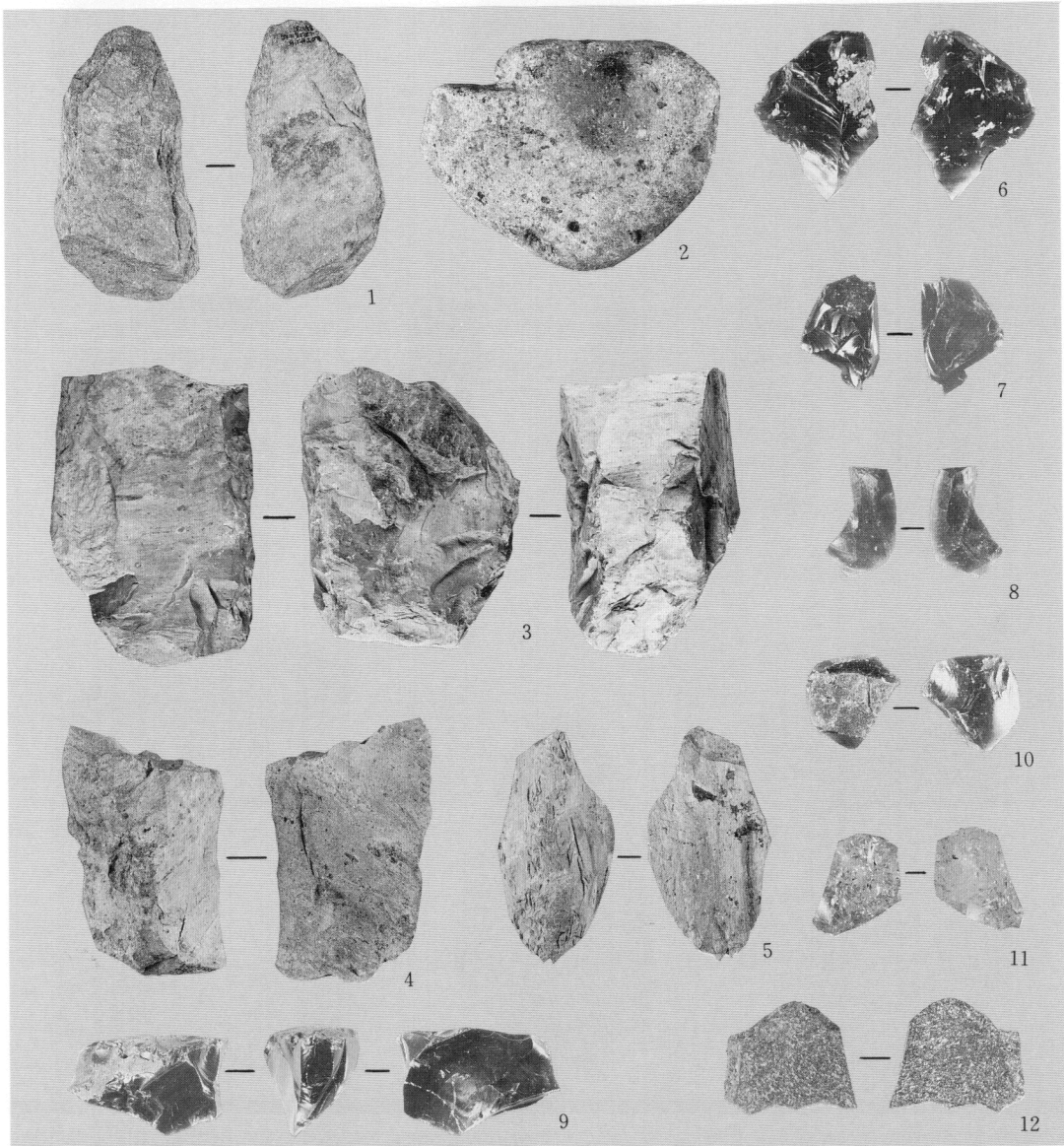
包含層出土土器(縄文土器・弥生土器・土師器・瓦質土器)



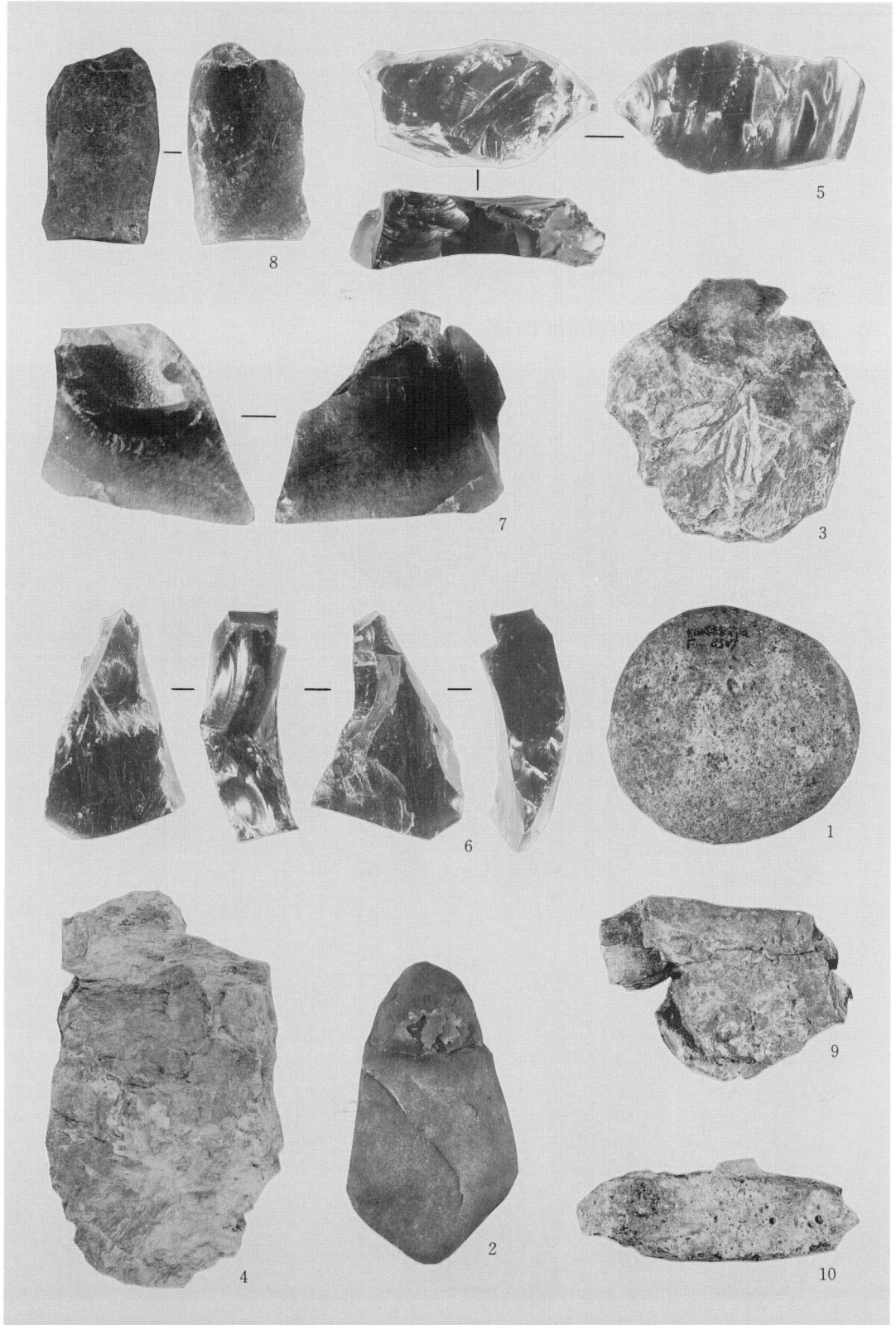
包含層出土土器(須恵器・磁器・陶器)



(1) Bトレンチ第1号竪穴住居跡出土石器



(2) Cトレンチ第3号土壙出土石器



包含層出土石器・鉄器・その他

山口大学構内遺跡調査研究年報 V

正誤表

訂正箇所	誤	正
37ページ 21行	<u>鋼</u> 滓	<u>鉾</u> 滓
同 22行	<u>鋼</u> 滓	<u>鉾</u> 滓
198ページ No.48	神田遺跡の項	(削除)
199ページ No.72	土師器	土師器・ <u>石棒</u>
200ページ No.95	後河 <u>内</u> 遺跡	後河 <u>原</u> 遺跡